

田俊藏
角書大郎

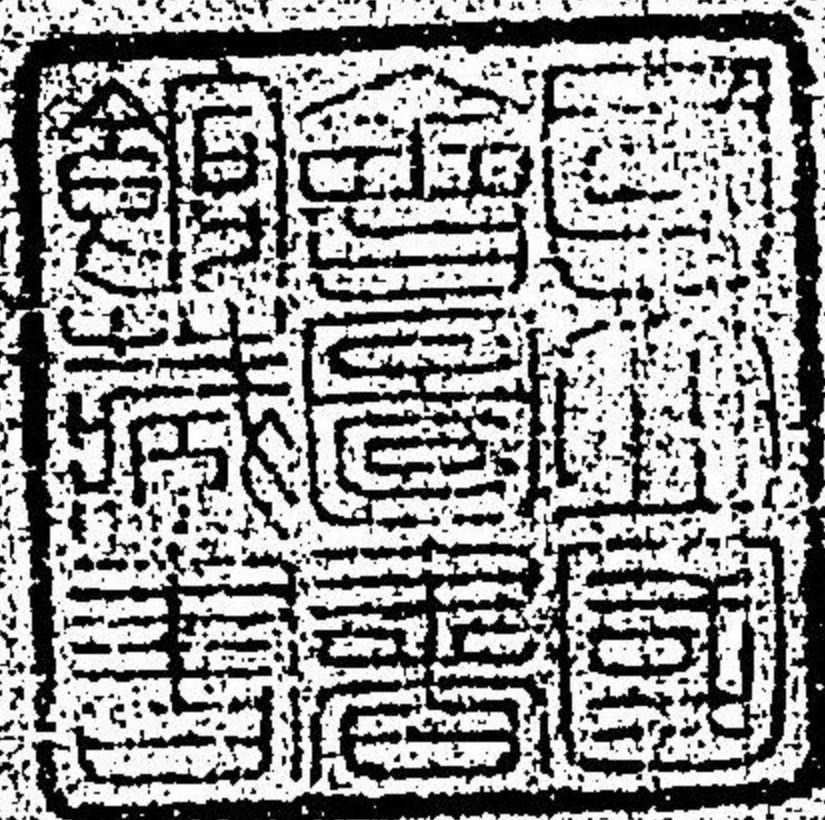
著
近世事情

四

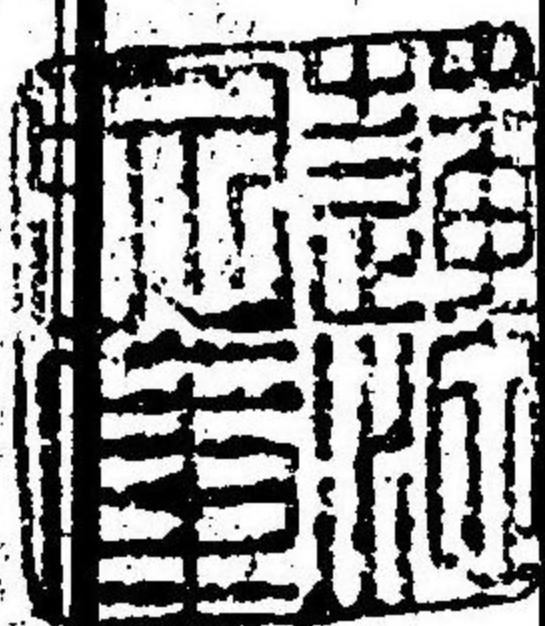
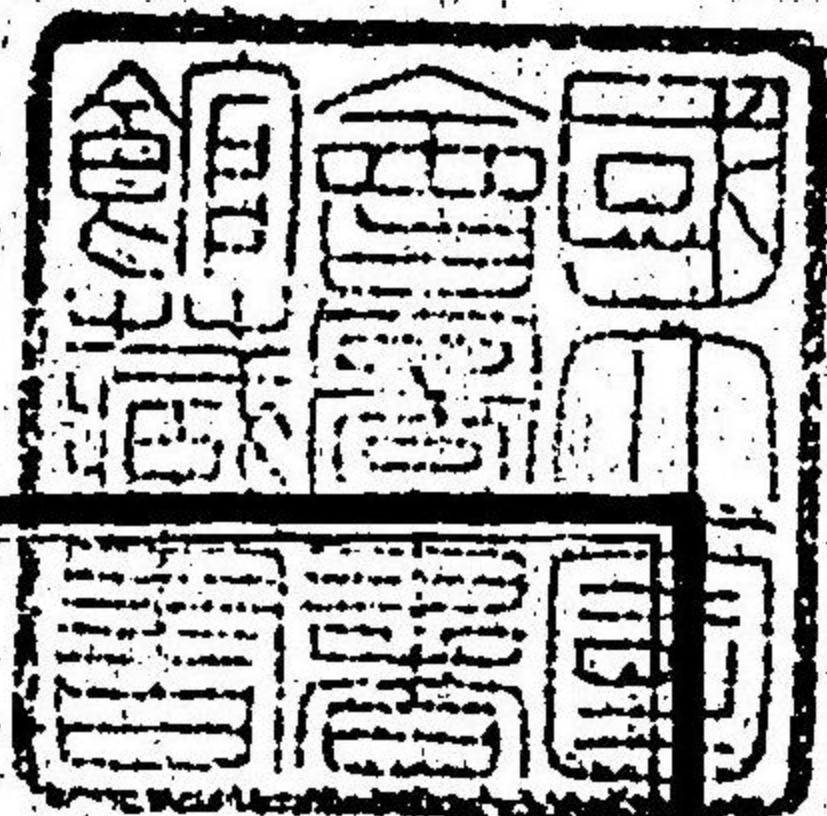
210.61

Y219k

560
2
2



284663



山田俊成
大田重治著 近世事情卷四

文久三年ヨリ元治元年ニ至ルマテ二年間ノ開
化進歩ニ關スル紀事

文久三年一編
公入京

文久三年正月五日一編中納言京師ニ至リ本願寺
ニ館ス閣老小笠原長行水戸藩武田伊賀守等之ニ
從テ此日魯人江戸ニ來リ英佛兵ヲ舉ケ來ル旨ヲ
忠告ス○六日佐賀老侯江戸ニ至ル○八日大將軍
親ラ佐賀老侯ニ命シテ文武ノ事ニ預ラシム○十
日高智老侯上京セント横濱ヲ發艦ス○十三日江

近世事情

卷之四

大田重治

戸ニテ浪士等高槻藩宇野八郎ヲ斬ル○十五日熊
 本彦京師ニ至ル○二十二日總裁職越前少將モ亦
 京師ニ朝セント江戸ヲ發ス是日大阪ニテ浪士等
 處士池内大學ヲ殺シ其首ヲ難波橋ニ集シ其兩耳
 ヲ斬リ一ツヲ中山大納言一ツヲ三條中納言ノ邸
 ニ投ズ後兩卿之ヲ以テ議奏ヲ辞ス蓋シ大學ハ戊
 午ノ頃專ラ攘夷ノ説ヲ唱ヘ士氣ヲ振作セシガ是
 ニ至テ吏吏ト拮据スレバ此禍ニ罹ルト云○二十
 八日京師ニテ浪士等千種家ノ臣賀川肇ヲ暗殺シ
 其首ヲ三寶ニ載セ一橋中納言ノ旅館ニ出シテ曰

賀川肇暗殺ノ事

此肇ルモノ戊午以來島田宇那等ト幕意ニ設
 奸曲ヲ逞フスルモノナレバ天誅ヲ加ヘ攘夷ノ血
 祭ニ之ヲ獻ズ又其兩腕ヲ斬リ岩倉千種兩家ニ投
 ザルト各一ツ是ヨリ先ニ中納言ノ入京スルヤ諸
 藩士及ヒ浪士等攘夷ノ期限ヲ以テ之ニ逼ル中納
 言乃チ將軍ノ上洛ヲ俟テ之ヲ決セント諭ス是ヲ
 以テ浪士等大ニ其因循ヲ憤激シ此舉ニ及ブ○二
 十九日近衛左大臣忠熙關白職ヲ辞ス鷹司右大臣
 輔熙之ニ代ル○二月三日此日ヨリ十二日マデニ
 英船八艘横濱ニ来ル○十一日熊本藩真武兵衛款

鷹司右大臣關白トナル

廣武兵二筆樓
秀ヲ通

藩久坂玄瑞寺島忠三郎高智藩武市半平太等開白
 家ニ詣リ攘夷ノ期ヲ逼ル○十三日大原左衛門尉
 裏辻侍從禁錮セラル此日大將軍入朝セント江戸
 ヲ發シ路ヲ東海道ニ取ル山形侯松山侯等數十名
 之ニ從フ○十四日朝廷青蓮院官ノ多年玉事ニ精
 勤セラルヲ以テ之ニ還俗セシメ中川官ト稱シテ政
 務ニ與ラシム○十八日朝廷日ノ門前ニ學習院ヲ
 設ケ有志ノ輩ヲシテ國家ノ為ニ建論セシム○十
 九日英船一艘品川ニ來リ國書ヲ幕府ニ出シテ曰
 去年武州生麥村ニテ嶋津三郎我士官ヲ殺セリ請

英ノ難題

中川官

贖金五十萬元

フ三郎ノ一族ヲ捕ヘ我等ノ前ニ於テ其首ヲ刎ヨ
 若シ然ラザレハ則日本政府ヨリ贖金五十萬元ヲ
 得テ鹿兒島ヨリ三萬元ヲ出サシメ是レモ亦領
 セザレバ直チニ軍艦ヲ率ヒ來リテ兵端ヲ啓シ因
 テ今ヨリ二十日ノ間ニ返答セヨト日ヲ刺シテ迫
 ル時ニ將軍入朝セント曩ニ江戸ヲ發シ一稿中約
 言越前少將モ皆京師ニ留リケレバ老中等大ニ狼
 狽シ將軍ノ東歸ヲ俟テ事ヲ決セント諭スルヲ再
 三即チ急ヲ將軍ニ報セルガ京師ニテハ三條中納
 言阿野中將正親町少將妙小路少將高智老侯以下

三條公等
ヲ促ス

數十人一搗中納言ノ旅館ニ詣リ攘夷ノ期限ヲ逼
ル萩侯世子モ亦関白家ニ之ヲ促ス皆將軍ノ上洛
ヲ俟テ之ヲ處セント答ヘラル○二十二日京師ニ
テ浪士三輪田綱一郎諸岡節齋和田雄太郎青柳健
之助長尾郁三郎等十餘人洛西等持院ニ至リ足利
尊氏義詮義滿三木像ノ首ヲ斬リ三條河原ニ梟シ
其側ニ掲書シテ曰賊魁源頼朝ヨリ北條足利ニ至
リ凶逆ヲ逞フスルヲ勝テ數フベカラズ而シテ我
等五百年以前ニ生レ其生首ヲ引拔クヲ能ハズ遺
憾山ノ如クナレバ今ヨリ不臣ノモノヲ誅戮セシ

浪士等ニ列三
將ノ本像ヲ斬

浪士將建
論

此ノ如シト蓋シ足利氏ノ凶暴ヲ唱ヘテ幕府ニ
擬スルナリ時ニ將軍ノ上洛モ近キニアレバ「テ
人矢ニ之ヲ忌ム守護職會津少將モ大ニ其疎暴ヲ
惡ミ即チ三輪田諸岡以下數人ヲ捕ヘテ其殘黨ヲ
索ル頗ル嚴密ナリトモ多ク之ク所ヲ知ラズ是ニ
於テ萩侯世子朝廷ニ上書シテ曰浪士輩等持院ノ
舉ヲ起セルハ足利氏ノ凶逆ヲ惡ミ名分ヲ明ニセ
ント欲スルモノニテ毫モ私心ヲ抱クニアラズ故
ニ請フ寛典ヲ以テ之ヲ處センヲ越前中將會津
少將等之ヲ聽サズ是ヨリ諸國ノ浪士等大ニ毛利

阿州侯馬ヲ朝
廷ニ獻ス

家ヲ慕フ一主將、如シ此月徳島侯馬十匹ヲ朝廷
ニ獻ス是ヨリ先ニ朝廷一橋中納言越前中將及ビ
在京ノ諸侯ヲ參朝セシメ勅シテ各戮力忠誠ヲ抽
ンテ、攘夷ノ成功ヲ奏スベキ旨ヲ命ニ沿海ノ諸
藩ヲ本國ニ遣リ兵備ヲ修メシム○三月四日大將
軍京師ニ入り二條城ニ館ス老中以下之ニ從フモ
ノ九三千人騎兵銃手之ヲ衛ルモノ千人餘整列頗
ル儼然ヨリ○六日幕府在府ノ列藩麾下布衣以上
ヲ總登城セシメテ敢死以テ英船ヲ防撃スベキ旨
ヲ命ス○七日幕府上ノ山関宿龜田靖江等ノ七侯

將軍ハ
シテ

將軍金ヲ洛氏
ニ販フ

賀茂ニ行幸フ

ニ命シ御殿山濱殿越中島ヲ守衛セシム此日大將
軍始テ參朝シテ寛永年間大猷公上洛ノ舊例ニ依
リ洛中ノ諸民ニ黄金六萬三千圓ヲ販フ○八日幕
府英國へノ返答十五日ヲ延フ時ニ府下騷然諸侯
邊ニ妻女ヲ本國ニ移スモノ多シ○十一日帝賀茂
ニ行幸ス將軍及ヒ諸侯皆衣冠ヲ着シ鎧馬ニ跨リ
テ之ニ從ヒ諸民ヲシテ縱觀セシム是レ夷狄ヲ親
征スル首途ナリト云○十二日島津三郎建言シテ
曰臣近頃輦下ノ形勢ヲ察スルニ國家危急ノ秋ナ
レバ屢愚見ヲ獻ズレドモ一行ハレズ却テ公武

島津二郎京師ヲ脱ス

齟齬ヲ生シ護者ヲ逞フスルニ至リ恐懼ニ堪ヘズ而シテ攘夷ノ議モ既ニ決セバ請フ本國ニ就テ之ガ備ヲナサント書ヲ置キ十七日本國ニ歸ル○十七日教彦世子兵庫ニ行ク此餘在京ノ列藩國ニ歸ルモノ甚ダ多シ曩ニ不日攘夷ノ舉アレバ沿海ノ諸藩ニ暇ヲ賜フヲ以テナリ○十七日大將軍參朝シ英國難題ノ事ヲ以テ東歸セントテ請フ朝廷之ヲ許サズ却テ攘夷ノ期ヲ決シ人心ノ歸嚮ヲ處シ以テ京師守衛ノ指揮ヲナサシム○十九日英國ヘノ返答又三十日ヲ延フ此日大將軍及ヒ一橋中

將軍東歸ヲ請フ

五月十日ヲ攘夷ノ期トナス

納言板倉周防守小笠原圖書頭等參内シケレバ朝廷乃チ五月十日ヲ攘夷ノ期トナシ之ヲ諸藩ニ公告シ其大小ニ随テ急ニ親兵ヲ出サシム○二十一日橫濱ニテ石工民藏ナルモノ佛人ニ銃殺セラレ此日越前中將辭職ヲ請ハドモ免サレザレバ京師ヲ脱シ本國ニ歸ル曩ニ浪士等頻ニ攘夷ノ期ヲ迫レバ中將事ノ至難ナルヲ思ヒ之ニ及○二十三日黄昏大將軍俄ニ參朝シ關東ノ事情切迫ナレバ必ズ東歸セント請フ朝廷將ニ之ヲ許サントス○二十五日朝議遽ニ變シテ將軍ノ東歸ヲ留メ水戸侯

將軍東歸ヲ強請ス

新編

関東ニ下シ江戸守衛及、大將軍留京中ノ目代
 タラシメ小笠原壹岐守ヲ之ニ属シ英國へ返答ノ
 事ヲ司ラシム○二十九日江戸ニテ邏卒半七及ヒ
 文助ナルモノ殺サル何人ノチス所ヲ知ラズ此月
 ヨリ浮浪ノ徒ニツニ合レ一ツハ壬生浪士ト称シ
 壬生ニ屯集セルガ幕府謀ル所アラントテ之ニ糧
 食ヲ給シ新徴組ト名ヅク一ツハ毛利家ヲ慕フモ
 ノニシテ正義黨ト唱へ各推勢ヲ振フ○四月二日
 江戸ニテ新徴組ノ徒攘夷ノ軍須ト称シ市中ノ豪
 富ニ金ヲ募ル後益甚シ○四日幕府秋田小田原庄

男山ニ行幸ス

東人ト共ニ謀
ルニ足ラズ

内高寄中村五侯ニ市中巡邏ヲ命ス浪士ノ跋扈ス
 ルヲ以テナリ○十日新徴組ノ徒市民ヲ掠奪セル
 其同組二人ヲ斬リ首ヲ兩國搦ニ藪ス○十一日帝
 男山八幡ニ行幸ス將軍病ヲ以テ從ハズ是日帝八
 幡祠ニ於テ攘夷ノ節刀ヲ將軍ニ授ケントセルガ
 將軍俄ニ病ト称シ供奉ヲ辞ス是ヲ以テ一搦中納
 言ヲ之ニ代ラシム中納言モ亦俄ニ病ト称シ祠ヲ
 下ル時浪士等之ヲ聞キ大ニ憤激シ罵テ曰咄開東
 人ノ怯懦ナル共ニ事ヲ謀ルニ足ラズト遂ニ帝ノ
 親征アラント朝廷ニ逼ル○十三日新徴組ノ首

謀清川八郎斬ル何人ノナス所ヲ知ラズ成ハ云
ノ幕府命シテ之ヲ暗殺セシムルナリ八郎ハ出羽
ノ人ニシテ初江戸ニアリ專ラ攘夷ノ説ヲ唱ヘケ
ルガ嘗テ人ヲ殺シ奥羽ニ走ル後京師ニ至リ復タ
攘夷ヲ唱ヘテ在京ノ諸藩士ヲ煽動ス是ニ至テ新
徴組ノ起ルヤ忽チ江戸ニ下リ其魁首トナリ將ニ
横濱ヲ襲ハントスレバ遠近騷然タリ而シテ幕府
頗ル制馭ニ苦シムルガ竟ニ首謀ヲ獲テ事乃チ平
ク○十五日巡市ノ諸藩新徴組ノ殘黨二十八人ヲ
捕○二十一日朝廷尾張大納言ヲ將軍ノ輔佐ト

清川八郎斬ル

一橋公東下ス
將軍振海ヲ巡

ナシ肥前中將ヲ文武總裁職ニ任シ姫路侍從ヲ大
老ニ任シ一橋中納言ヲ關東ニ下シテ水戸侯ト共
ニ鎖港ノ事ヲ謀ラシム蓋シ男山行幸ノ時中納言
ノ不當アルヲ以テナリ是日將軍石清水八幡祠ニ
詣リ遂ニ大阪ヲ巡視ス○二十二日一橋中納言京
師ヲ發ス○二十三日大將軍軍艦ニ乘リ振海ヲ巡
覽シ二十八日紀州ニ至リ廿九日歸坂ス○五月三
日幕府今夕兵端ヲ啓クモ測リ難ケレバ士民之ヲ
領セヨト布告ス○九日一橋中納言小笠原壹岐守
龜山侍從濱松侍從等相謀リテ書ヲ各國公使ニ與

江戶幕府 卷之五 一橋公東下ス

近世事情 卷之四 英佛公使會

鎖港各國ニ告テ

英佛公使會 兼吏ノ應斷

ヘテ曰我民元來外交ヲ始メバ鎖港ハ論日ニ沸騰セルガ頃者京師ヨリモ頻ニ閉港ノ命ヲ下セリ故ニ請テ暫ク諸港ヲ鎖サント英佛公使等大ニ之ヲ怒テ曰生麥ノ事モ未ダ處セズシテ何ゾ靦然ト此書ヲ出マシムヤ且嚮ニ盟ニシ條約ニ永ク和親シテ互ニ之ヲ渝ヘズトアルモ亦已ニ忘レタルヤ而シテ此大事件我等ノ敢テ能ク斷ズル所ニアラズ宜シク本國ニ謀リ其當否ヲ決スベシトテ將ニ干戈ヲ動カサントスルノ勢ナレバ淺野伊賀守井上信濃守等大ニ驚怖シ以為縱ニ京師ノ近況ハ如

四十五萬元ヲ 一橋公儀ヲ許ス

何ナルトモ一旦兵端ヲ啓ケバ太平期スベカラズ此時ニ當リ京師ヲ慰メ外國ヲ宥ムハ我等ノ職掌ニシテ千古ノ良策ナリ且生麥ノ一由我ニアルニ似タルバ名義ヲ正シテ後拒絶セント水戸侯等ニ逼ル衆議之ニ決シ終ニ贖金四十五萬元ヲ英人ニ與フ英船乃チ品川海ヲ退帆ス時ニ一橋中納言モ江戸ニ歸ヘルガ關東ノ情實止ムヲ得ザレバ短才無似ニシテ攘夷ノ大事件ヲ奉ズルヲ能ハズトテ屢免職ヲ請フ

野史氏曰英國ノ贖金ヲ幕府ニ苛責スルヤ列藩

九

近世事情 卷之四 北條氏綱成

内ニ騷擾シ四夷外ニ強梁シ朝廷日々ニ操夷ヲ
逼レバ此時ニ當リ幕吏ノ舉措モ亦難哉而シテ
其贖金ヲ彼ニ與ヘン畢竟怯懦ノ情ヨリ出デ、
頗ル失策ニ似タレドモ却テ後世ノ幸トナリ且
萬國ノ公法ニ依テ之ヲ觀レバ人禮ヲ我ニ失フ
トモ妄ニ之ヲ殺スベカラストアレバ是レ天下ノ
通義ニシテ既ニ同盟ヲ結ベハ共ニ守ラザルベ
カラス故ニ當時ノ幕吏ハ夫レ此公理ヲ洞察セ
ルカ又國力兵勢ノ敵スル能ハザルヲ審ニスル
カ之ヲ要スルニ所謂怯犬却テ後利ヲ獲ルモノ

ニアラズヤ

十日米船一艘豊前田ノ浦ヲ過ルニ當リ萩藩之ヲ
炮撃ス米船モ亦炮ヲ發シ之ヲ防グドモ竟ニ利
ラズシテ退ク是ヨリ先ニ毛利家大ニ長州赤馬関
ノ砲臺ヲ修理シ攘夷ノ端ヲ啓ントスレバ是ニ至
テ事ニ及フ初攘夷ノ令出デシヨリ此舉ヲ以テ攘
夷ノ始トス○十二日幕府演殿ニテ大砲十發スル
ヲ以テ異變ノ號炮トス○十九日小笠原壹岐守
水野凝雲井上信濃守等神奈川ヲ發艦シ大阪ニ赴
ク兵士十餘人之ヲ衛ル此夜京師ニテ姉小路少將

攘夷鳴矢

子砲十發

姉小路少將要
殺スル

近世事情 卷之四 北條氏綱成

侍臣吉村右京金輪勇ヲ從ハテ朝年門ヲ過ルニ當

リ人アリ三人不意ニ少將ヲ要撃ス金輪勇之ヲ見

テ狼狽逃走ス吉村右京獨リ敢死防撃スレドモ衆寡敵スル能ハザレバ賊徒遂ニ少將ヲ殺テ去ル人其故ヲ知ラズ道路薩人ノ所為ト云時ニ朝廷少將ガ忠誠ヲ善ミシ宰相中將ヲ追贈シ其臣金輪ノ不忠ヲ罰シ吉村右京ノ忠節ヲ賞シテ黄金三枚ヲ賜フ而シテ賊徒ヲ逮捕スルト頗ル嚴ナリ右京ハ但州出石ノ藩士ナルガ後澤主水正等ニ從テ但馬銀山ニ兵ヲ舉ケ遂ニ農民ノ為ニ銃殺セラレ○二十

東田新太郎斬

後藩佛船ヲ擊

蘭船ト戰

原申丸沈没

西城失

日京師ニテ浪士等處士家里新太郎ヲ殺シ三條河原ニ衆ス蓋シ新太郎開國論ヲ主張スレバナリ○二十三日萩藩下関ニテ佛船ヲ砲撃ス互ニ勝敗アリ○二十五日朝廷鹿兒島藩真禮女之元田中権平淵田太市ノ捕ヲ姉小路少將ヲ要撃スルヲ疑フナリ○二十六日萩藩又下関ニテ蘭船ト戰フテ死傷ヲ互ニス○六月朔日米船下関ニ來リ襲フ長船康申丸米船ノ為ニ沈没セラレ砲臺モ亦毀タル此日朝廷萩侯父子ノ内一人ヲ輦下ニ召ス○三日大將軍參朝ニ東歸ヲ許サル是日江戸大ニ燒亡ニ西城

長二日

十一

大島丸

佛船長門

○五日中川宮大ニ奮激シ建言シテ稜旁
 ノ先鋒ヲランテ請フ而シテ此日佛船長門ヲ襲
 赤馬閣檀浦杉谷ノ砲臺ヲ打毀シ上陸シテ前田
 村ニ至リ人家ヲ焼クテ三四町殺落銀槍ノ以テ横
 其隙中ヲ衝キ僅ニ之ヲ却ク時ニ小倉藩以為暴
 接弟ノ令出ルトモ幕意ニアラズト是ヲ以テ袖
 手傍觀シ援兵ヲ出サレバ則朝廷列藩ニ令シテ
 曰弟船接討ノ持自他ヲ論トズ互ニ相援ケ以テ急
 援弟ノ功ヲ奏セヨ若シ之ヲ傍觀スルモアラ
 違勅ニ處セン○七日小笠原壹岐守井上信濃守等

小倉藩

高取藩

伏見ニ至ル是レ暴ニ將軍ノ上洛スル朝廷之ノ留
 テ返サレバ老中小笠原等大ニ憤激シ兵ヲ率
 テ將軍ヲ強奪シ以テ東歸セントテ將ニ京師ニ
 入ントス朝廷モ亦之ヲ知テ其入京ヲ許サズ却テ
 暴ニ朝命ヲ俟タズシテ英人ニ償金ヲ與ヘシ罪條
 ノ數ヘ其官爵ヲ奪ヒ大阪城代松平伊豆守郎ニ禁
 錮セシム○九日大將軍京師ヲ發シ大阪ニ赴ク○
 十三日大將軍大阪ヲ發艦ス○十四日鳥取藩士大
 阪ニテ英船ヲ砲撃ス英船敵トズシテ直チニ去ル
 ○十六日大將軍江戸ニ歸ル此日朝廷正親町少將

監軍勅使

ノ監軍勅使トシテ長門ニ下ス熊本秋田高智久留
 米藩士親兵トシテ之ニ從フ益シ萩藩攘夷ノ端ヲ
 啓ケバトリ○十七日幕府東北ノ列藩十四名ヲ江
 戸ニ來シシノ攘夷ノ事ヲ議ス○二十三日神奈川
 ニテ人アリ長州ヲ襲ヒシ英船ノ水先案内重兵衛
 ナルモノヲ殺シ其首ヲ小安村ニ島ス何人ノナス
 所ヲ知ラズ○二十五日朝廷守護職會津少將ヲ召
 シ攘夷ノ事ニ精忠ヲ抽ンヌベキ旨ヲ勅シ小栗下
 總守ヲ東下ヒシメテ攘夷ノ期限ヲ促シシム此月
 萩侯黃金一萬圓ヲ朝廷ニ獻ス○七月二日英人軍

重兵衛殺サル

萩侯獻金

英人薩藩炮

艦十艘ヲ率ヒ薩州鹿兒島ニ來リ逼テ曰甚ニ武州
 生麥村ニテ殺害セラレシ士官ノ妻子養育料トシ
 テ金三萬元ヲ得ント鹿兒島侯之ニ答テ曰其士官
 タルモノ禮ヲ我ニ失ハバ之ヲ誅ス何ゾ贖金ヲ以
 テセシヤ是ニ於テ英人炮ヲ發シテ迫ル此日適風
 烈ク雨甚シケレバ鹿兒嶋藩之ヲ天幸トナシ炮擊
 スルヲ數合炮聲山谷ニ響キ海水沸カ如クナリシ
 カ英人遂ニ船將二名ヲ銃殺セラレ軍艦モ亦破損
 シ茫々トシテ去ル後此舉ヲ京師ニ奏スレバ朝廷
 感激ノ旨ヲ鹿兒島侯ニ勅ス○十二日勅シテ嶋津

英人敗走ス

監察使

監察使

徳島藩に本
船ヲ撃ツ

三郎ヲ上京セシム夷狄親征ノ事ヲ以テナリ○
 四日幕府號令ノ天下ニ行レザルヲ歎シ幕威ヲ舊
 ニ復セシム謀リ乃チ中根一之允牧野左近村上求
 馬等ヲ密監察使トナシ百餘人ヲ之ニ属シ長州ニ
 至テ擅ニ洋船ヲ撃ツコトヲ詰リ且九州ヲ巡察セシ
 ムニト朝陽丸ニ乗り神奈川ヲ發セシム○十七日
 中根等淡路岩屋海ヲ過ルニ當リ徳島藩長坂貞治
 誤リ認メテ外國船トナシ之ニ砲撃セルガ後貞治
 割腹シテ其罪ヲ謝ス是日朝廷モ亦東園中将四條
 侍從ヲ監察勅使トシテ京師ヲ發セシム中將ハ紀

幕府ニ亦幕府
ノ事

伊加田浦侍從ハ播磨姫路ヲ巡視ス各親兵ヲ杖
 一若干○十九日京師ニテ浪士等徳大寺家臣滋賀
 右馬大允ヲ暗殺ス○二十一日中根等小倉藩阿野
 理四郎柳生兵衛ヲ嚮導トナシ小倉ニ赴カント田
 ノ浦ヲ過ダレバ萩藩之ニ砲撃ス中根等乃チ小艇
 ヲ以テ之ヲ詰ラシム萩藩答テ曰繼々幕船タリト
 モ洋船模造ノモノハ之ヲ討ツン若シ然ラザレバ
 洋船ヲ誤認シテ我船トナシ討タザレバ可ナラシ
 ヲ中根等答フル所ヲ知ラス遂ニ船ヲ長州路ニ入
 レシトス時ニ處々ノ砲臺悉ク壞夷ノ旗ヲ揚ケ砲

幕使大尉

浪士等共商

大藤

幕使中一之

礮劍槍以テ之ヲ成レバ容易ニ近ヅクベカラズシ
 中根等大ニ困却ス而シテ阿野柳生兩人船中ニ
 テ自裁ス小倉藩ノ其幕使ニ左袒スルヲ責レバナ
 リ○二十三日京師一テ浪士等嘉商八幡屋卯兵衛
 ヲ殺シ三條河原ニ梟ス○二十六日浪士等又大藤
 出叟ヲ斬リ三條札場ニ梟ス此日中根一之允牧野
 左近村上求馬等船ヲ長門ニ留メ上陸シテ九州諸
 國ヲ巡視ス左近求馬後八月中旬ニ至リ江戸ニ歸
 ル一之允獨リ長門ニテ萩藩ノ爲ニ暗殺セラレ是
 ヨリ幕府大ニ長州ヲ忌ム○二十七日京師ニテ浪

人ヲ恐ミテ坐

大和ニ行幸

士等高臺寺ヲ燒ク蓋シ高臺寺ハ福井老侯ノ旅館
 ニシテ當春老侯朝命ヲ俟タズ國ニ歸ヘレバ浪士
 等之ヲ擬スルニ朝敵ヲ以テシ此舉ヲナスナラン
 ○八月五日帝若松藩ノ練兵ヲ日ノ門外ニ覽ル攘
 夷ノ親征近キニアレバナリ○八日朝廷中川宮ニ
 鎮西將軍ヲ命スルノ内旨ヲ勅ス○十三日朝廷大
 和ニ行幸シテ神武天皇ノ陵ヲ拜シ春日山ニテ攘
 夷親征ノ軍議ヲナスベキ旨ヲ天下ニ令ス是レ先
 ツ大和ニ行幸シテ攘夷親征ノ朝旨ヲ天下ニ示サ
 ント萩侯ノ請ヘル所ナリ○十四日鳥取岡山米澤

鈴木重胤

大和五條

三侯及、徳島侯世子参内シテ攘夷ノ親征ヲ止ル
 一ヲ奏請ス朝廷取テ聽サズ ○十五日江戸ニテ浪
 士等處七鈴木重胤ヲ殺ス ○十六日朝廷名古屋老
 侯ニ大阪守衛ノ指揮ヲ命ス ○十七日松本謙三郎
 藤本鏡石等兵五百餘ヲ率ヒテ大和五條ヲ襲ヒ縣
 令鈴木源内及ビ小吏長谷川泰次以下五人ヲ殺シ
 櫻井寺門前ニ集ス初謙三郎等大和河内ノ間ニ尊
 攘ノ説ヲ唱ヘシガ適中山侍從忠光モ同論ニシテ
 幕府ノ因循ヲ憤リ京師ヲ脱シ為ス所ヲラントス
 謙三郎等乃チ之ヲ奉ジテ兵ヲ舉ケ號シテ天忠組

大和五條

ト云諸國ノ浪士之ニ會スルモノ凡千人是ニ於テ
 河州狭山等ニ抵リ藩主ヲ諭シテ曰不日弟秋親征
 ノ舉アルバ我等先ツ奸吏ノ征討シテ其先鋒ヲ
 シト欲ス請フ大小砲馬具等ヲ借ヤヨト遂ニ之ヲ
 借リテ五條ニ抵リ鈴木ヲ侵撃シ其糧米兵器彈藥
 ヲ奪フテ之ニ據リ近傍ノ地ヲ天領ト稱シ租税ノ
 半ヲ減シ務テ人心ヲ収ム ○十八日朝廷大和行幸
 ヲ止ム昔ヲ令ス是夜在京ノ萩藩悉ク本國ニ歸ル
 三條中納言東久世少將壬生修理大夫四條侍從澤
 主水正等七卿萩藩ト同論ナレバ之ニ從フテ走ル

是ヨリ先ニ幕府ト長州ノ間大ニ不和ナルガ人
 リ萩藩ノ聲威ヲ嫉ミテ益其間ヲ分離セシメ又朝
 廷ヲシテ之ヲ疎ンゼシメント流言シテ曰大和行
 幸ノ令ヲ布ケルハ萩藩ノ至尊ヲ挾ミ四方ニ號令
 セント欲スルナリ是ニ於テ朝廷モ大ニ萩藩ヲ疑
 ヒ朝紳武弁ヲ會シ三條以下七卿及ヒ萩侯父子ヲ
 擯斥セントスルガ變ノ起ルヲ慮リ急ニ在京ノ諸
 侯ニ命シ嚴ニ九門ノ守衛ヲナサシム時ニ市民事
 ノ起ルトナシ負擔相奔リ府下頗ル囂然タルハ長
 州ノ支藩毛利讃岐守及ヒ吉川監物等其故ヲ知ラ

毛利讃岐守吉川監物

ズ急ニ馳テ關ニ詣ル朝廷其入ルヲ許サズ是ニ於
 テ萩藩朝議ノ變ズルヲ察シ兵ヲ率ヒテ本國ニ歸
 ル○十九日一橋中納言老中等ト江戸近海ヲ巡視
 ス是日速ニ攘夷ヲナスベキ旨勅命アリ○二十五
 日朝廷三條中納言等七卿ノ官爵ヲ削リ且萩藩ニ
 與スル公卿橋本山將東園中將等十八人ヲ罰ニ萩
 藩ノ入京ヲ禁ズ是日幕府和歌山津彦根郡山四侯
 ニ勅シテ天忠組ヲ討ヒシム
 野史氏曰十八日ノ變ハ固ヨリ讒者ノ大謀ヨリ
 起ルヲ路人モ知ル處ナレドモ當時ニアリテ長

長州黨大ニ

人若シ面ニ唾セラ、ルモ能ク之ヲ忍ブノ心
ヲバ讒者モ夫レ之ヲ如何トモスルヲシ嗚呼惜
哉

二十六日天下ニ詔シテ曰近來真偽不分明ノ令錯
出シテ人心ヲ惑スモノ頗ル多シト雖本月十八日
以來ハ實ニ朕カ意ニ出ツ四方夫レ之ヲ體セヨ蓋
シ是レ朝廷救疾等ノ朝命ヲ矯テ天下ニ號令セシ
ト疑ヘバナリ此時天忠組松本謙三郎等朝議ノ變
ナルヲ聞テ曰事既ニ此ニ至レバ日アラズシテ幕
府必ズ我等ノ罪ヲ鳴ラシ征討ノ命ヲ下スベシ聖

天忠組討伐ス

別報

シテ兵ヲ受ルヨリ寧ロ一舉死ヲ決シテ名ヲ千古
ニ輝ラシト遂ニ是日曉霧ニ乘シ兵五百ヲ率ヒテ
大和高取城ヲ襲ヒ始ド城中ニ入ントス城主植村
駿河守大ニ奮激シ士卒ヲ鼓舞シテ之ヲ防キ終ニ
天忠組ヲ却ク天忠組敗走シテ天ノ川辻ニ據ル時
ニ京師大阪戒嚴ニシテ救藩モ國ニ歸ヘバ浪士
等頼ハ所ヲ失フテ天ノ川辻ニ來リ會スルモノ五
百餘人は是ヲ以テ天忠組再ビ振ノ○九月朔日朝廷
速ニ攘夷ノ期限ヲ決スベキ旨ニテ大宰帥熾仁親
王ヲ別勅使トナシ關東ニ下ラシム○二日江戸ケ

徵召止ム

水野門

近衛公の閉白
ニ與フル等

谷村ニテ佛人一名斬ラルル何人ノ所為ヲ知ラズ此
 日幕府令シテ變書調所ヲ開成所ト改ム○六日勅
 シテ列藩ヨリ親兵ヲ貢獻スルヲ止ム暴ニ徵兵
 ノ令出ルヤ經費頗ル夥多ナリバ邦内ノ疲弊ヲ患
 テナリ此日和歌山藩水野多門兵ヲ率ヒテ吉野ヨ
 リ天忠組ヲ討ツ天忠組乃チ小銃ヲ聯發シ以テ之
 ヲ拒ミ奮撃數合多門銃丸ニ中リ死ニ瀕ニトス而
 シテ士卒モ亦多ク闕死ス○七日近衛前關白忠熙
 書ヲ關白鷹司家ニ呈シテ曰薩長土三藩ハ誠忠正
 義ノモノニシテ諸藩ニ先々チ浪士ノ暴舉ヲ鎮撫

藤堂新七

シ尊攘ノ説ヲ主張シ遂ニ皇威ヲ天下ニ耀スモ皆
 三藩ノ致ス所ナレバ其功實ニ益フベカラザルニ
 矣吏等妄リニ聲威ヲ嫉ミ之ヲ讒シテ其入京ヲ禁
 ズ何ゾ不明ノ甚キ此ニ至ルト夫レ方今ノ如キ政
 務多端ノ秋ニ當リ遠謀深慮共ニ謀ルニ足ルモノ
 ハ此三藩ニアラズシテ誰ゾヤ今足下要路ニ居レ
 バ請フ少ク之ヲ察セヨ○八日津藩藤堂新七兵六
 百餘ヲ以テ天ノ川迂ニ向フ天忠組即チ各所ニ伏
 兵ヲ置キ伴テ走ル津ノ兵之ニ乘シテ進ミ大ニ伏
 兵ノ為ニ撃タル時ニ彦根藩之ヲ援ケ津ノ兵ト共

十津川ノ終

ニ死カラ盡シテ天忠組ヲ御ケ追テ十津川ニ至
 バ日巳ニ暮ル、ヲ以テ兵ヲ引ク既ニシテ天忠組
 夜ニ乗シ彦根ノ軍營ヲ襲ノテ去ル彦根ノ兵之ニ
 死スルモノ二十餘人○十四日幕府軍艦所ニテ米
 蘭公使ヲ召シ三港拒絶ノ書ヲ引返シ横濱鎖港ヲ
 命ズ蓋シ八月十八日ノ變動ヲ以テ鎖港遲延スベ
 カラズトノ勅命關東ニ下レバナリ○十五日津彦
 根等ノ兵大ニ天忠組ヲ撃テ之ヲ解散セシム松本
 謙三郎藤本錢石等皆之ニ死シ安積五郎以下數十
 人執ヘラル池内藏太牧阿施平大澤逸平等中山侍

三港拒絶

天忠組平ク

六侯ノ建議

役ニ随ノテ長州ニ抵ラント大阪ニ走ル是ニ於テ
 天忠組ノ乱遂ニ平ク○十九日幕府英佛公使ヲ召
 シ謀ル所アラントスレドモ来ラズ○二十四日岡
 山廣島徳島津山鳥取津六侯朝廷ニ建言シテ曰去
 ル十八日ノ變頗ル疎暴ノ舉アリト雖元来薩長ニ
 藩ハ満天下ノ士民ニ勤王ノ二字ヲ教令セシ實ニ
 朝家ノ忠臣ナリ然ルニ嫌疑ヲ以テ妄リニ之ヲ疎
 斥セバ列藩皆鼠首兩端シ敢テ王事ニ勤ムルモノ
 ナカラン代テ請フ速ニ二藩ヲ輦下ニ召シ政務ニ
 預カラシメンコトヲ時ニ度兒島侯ニ故アリテ本國

津山侯

長瀬英之助

ニアレバナリ○二十五日津山侯獨り建白シテ急ニ關東ニ下リ幕吏ヲ輔ケテ攘夷ノ期ヲ決セント請フ○二十七日萩侯朝廷ニ歎訴シテ曰臣父子多年尊攘ニ心ヲ盡シ日夜勉勵シ以テ皇威ヲ海外ニ耀サントス而シテ夷狄親征ノ期ニ近キニアラントスレバ臣父子欣然之が先鋒タラント欲セルが豈ニ圖ランヤ遷ニ大和ノ行幸ヲ止メ且臣が塚町門ノ警衛ヲ罷メテ輦下ニ入ルヲ禁セラル是ニ於テ臣が赤心裂ント欲シ竊ニ以為是全ク護人ノナス所ナラン急ニ上京シ之ヲ理解セント欲スレド

島津三郎上京

松平春嶽山内

モ亦慮如何ヲ懼ル伏テ請フ之ヲ憐察セヨ○二十八日鹿兒嶋藩滋野孝之允等横濱ニテ英人ト生麥村ノ事ヲ議ス○十月三日島津三郎復々上京シ幕府ヲ輔ケ速ニ攘夷ノ成功ヲ遂ケ天下治平ノ策ヲ議セント將軍及ヒ一橋中納言越前中將等ノ再上洛アラントテ奏ス○七日朝廷福井老侯高智老侯ヲ京師ニ召メ兩侯直ニ上京ス○十一日勅シテ大將軍ヲ再ヒ上洛セシメ且天下ニ令シテ曰近頃關東ニテ既ニ鎖港ノ應接ヲカセバ攘夷ノ事ハ幕府ニ任ズニシ自今諸藩輕舉暴發アルト勿レト

此令ノ布ケルヤ京極間ノ浪士等大ニ望ヲ失フテ
曰嗚嗟朝廷モ亦因循姑息ニ陷ルヤト相率テ長
州ニ走ル此日川越侯政事總裁ヲ命セラレ○十三
日幕府一橋中納言ヲ上京セシム京師ヨリ召スヲ
以テナリ是日銀山ノ兵敗レ平野二郎等拘ヘラレ
南八郎以下數十人鬪死ス初壬戌ノ夏平野二郎姫
路ニテ浪士ヲ集メ島津三郎が上京スルニ當リ機
夷ノ兵ヲ舉ケント逼ル事稍過激ニ涉レバ本國ニ
禁錮ヒラル後幾マナク朝命ニ應シ學習院ノ督長
トナリシガ近頃大和五條ニ天忠組ノ乱起ルヤ自

平野二郎

平野上勇片

ラ之ヲ鎮メシト請ヒ五條ニ詣ル時ニ二郎等十八
日ノ變ヲ聞キ大ニ憤發シ七卿ヲ復任シ長州侯ノ
冤ヲ解キ再々親征ノ議ヲ興サレト直チニ長州ニ
走リ七卿ノ一澤主水正ヲ戴キ同志ヲ糾合シテ京
師ニ強請セシトス浪士三五三平南八郎川俣才一
郎等之ニ會スルモノ三十餘人遂ニ但州生野銀山ニ
至リ縣令川上猪太郎ノ役邸ヲ襲ヒ金穀ヲ奪フ土
兵四方ニ起テ之ニ應シ兵勢稍振フ居ルニ數日姫
路龍野豊岡等諸藩ノ兵至ルニ適天忠組敗北ノ報
至レバ士氣大ニ挫ケテ衆潰散ス二郎等乃チ主水

銀山ノ兵

近世書目 卷之四 三十三 大前式義版

正ヲ奉シ去テ京師ニ赴シトセルガ同州豊川ニテ
 執ヘラル此時主水正僅ニ身ヲ以テ逃ル復々長州
 ニ走ル南八郎等敢テ從ハズ同志十二人ヲ率ヒ仍
 留テ杣見山ニ軍ス適手下ノ士誤テ村民ヲ銃殺ス
 土兵之ヲ以テ俄ニ反心シ竹笛ヲ吹キ衆ヲ集ム
 數百人皆鳥銃ヲ執リ山ヲ環リテ乱發ス飛丸雨
 如シ八郎等衆寡敵セズ遂ニ山ヲ下リ小阜ニ就キ
 八郎親ラ十一人ノ死ヲ歎シ自刎シテ死ス時ニ年
 三十八暴ニ八郎等銀山ニテ軍事ヲ議ス衆皆戰意
 ナケレバ八郎乃チ狂歌ヲ口占シテ之ヲ嘲ル其詞

南八郎等歌

南氏ノ狂歌

平野氏ノ歌

島津三郎兼盛

曰「ギロンヨリジツヲヲコナヘナマケブシクニノ
 ダイジヲヨソニミルバカ平野二郎モ嘗テ和歌ヲ
 賦ス一讀人ヲシテ興起ヒシハ歌ニ曰アマツルゼフ
 ケヨニシキノハタノチニナビカヌクサモアラジ
 トゾヲモフ○十六日島津三郎建議ノ略ニ曰方今
 大政改革ノ際ニ當リ各國一致上下一團ナラザル
 ベカラザルニ既ニ八月十八日ノ舉ノ如キ深ク震
 襟ヲ惱シ實ニ臣子ノ重罪逃ルベカラズ然レ朝紳
 亦舊弊ヲ抱キ事情ヲ察セザルコソ上下壅閉シ
 此變動ヲ醸スルニ至ラン且近頃ノ朝令旦夕

青侯論文

中根長十郎

ニ變ゼバ其倭其間ニ投シ私意ヲ逞クスルイモ亦
 多カラシ故ニ本立テ道明ナルノ明訓ニ隨ヒ先ツ
 天下ノ公議ニ依テ廷臣ノ忠誠ナルモノヲ拔擢シ
 次ニ諸侯士民ニ及ボシ以テ永世不拔ノ基本ヲ謀
 ラシメ朝廷一途ニ之ヲ信セバ攘夷ノ功モ亦速ニ
 奏スヘシ請フ急ニ列藩ヲ輦下ニ召シ其公議ヲ採
 用アラシム○二十三日江戸ニテ浪士等一搦家
 ノ臣中根長十郎ヲ暗殺ス此月萩侯父子其藩臣ニ
 諭シテ曰人ノ上下ノ分アリ君臣ノ別アリト雖皆
 均ク皇國ノ民ニテ其皇國ノ主ナルモノハ朝廷ナ

リ故ニ汝等ノ能ク我等ニ事アルハ即チ朝廷ニ事
 アルナリ我等若シ王事ヲ急レバ汝等我ヲ輔佐匡
 救シ能ク朝廷ニ事ヘシタルハ臣子ノ職ニシテ我
 等ノ幕府ニ於ケルモ亦然リ夫レ天下ノ諸侯ヲ率
 ヒ朝廷ニ藩屏シ外夷ヲ攘除スルハ征夷府ノ職掌
 トス若シ其職缺ル時ハカヲ盡シテ能朝廷ニ事ヘ
 シタル是レ我輩諸侯ノ職ナリ而シテ近比幕府ノ
 執政朝命ヲ奉マズ外夷ヲ近ヅテ其職掌稍缺ルニ
 似タルハ我等之ヲ匡正シ公武ヲ一和ナラシメ大
 樹公モ上洛シテ攘夷ノ期モ決シ我等ノ宿志始テ

本城再入
一橋公再入
京ス

達セント欣然セルが幕議遽ニ變シテ大ニ我等ヲ
疑テ朝廷モ亦我等ヲ疏ンズ我等是ニ至テ血淚兩
ノ如ク飲食咽ニ下ラズ故ニ今汝等我二州ヲ衛ル
ノミナラズ我等ヲシテ能ク朝廷ニ事ハ幕府ヲ輔
ケシメ以テ皇國ノ民タルニ負カガラシメヨ○十
一月五日幕府大將軍再々入朝スベキ旨ヲ天下ニ
布ク○十五日江戸大ニ焼亡シ本城復々災々後遂
ニ修メズ○十九日米人國書ヲ出シ鎖港ノ事万国
ノ例ヲ以テ戰フベキ旨ヲ云○二十二日幕府新徴
組ヲ庄内侯ニ附屬ヒシム○二十五日一橋中納言

井原主計

鎖港ノ使節

平ノ官

二條公關白

張紙ヲシ

入京シ東本願寺ヲ旅館トナス○二十六日萩藩井
原主計伏見ニ來リ萩侯父子ノ事ヲ建白スル所ア
ラント入京ヲ請フ朝廷允サズ○二十八日幕府池
田筑後守河津伊豆守河田相摸守ヲ英佛等ニ遣リ
鎖港ノ事ヲ議ヒシム是月朝廷中川宮ノ勤勞ヲ善
シシ彈正尹ニ任ス是ヨリ尹ノ宮ト稱ス而シテ鷹
司家關白職ヲ辭ス朝廷二條右大臣齊敬ヲ以テ之
ニ代フ時ニ京師及ヒ江戸市中天誅燒拂等ノ掲書
多シ甚シキニ至テハ榎炭ノ價未ダ下ラザレバ能
ク之ヲ處セヨ浪人衆ト云フ張紙ノルニ至ル○十

井原主計ノ歎

二月朔日井原主計又歎願シテ曰臣上京シテ宰相
 父子ノ罪ヲ謝シ書ヲ上リテ速ニ親征アラント
 請ハントスレバ今入京ヲ許サレザレバ臣進退之
 レ谷ル請フ入京ヲ許セヨ朝廷邊ニ伏見ニ於テ其
 書ヲ出サシム○十六日幕府浪士ノ事ヲ以テ諸國
 ヲ印鑑ナクシテ通行スルヲ禁ス○二十四日薩
 州ノ商船兵庫ヨリ長岑ニ至ラント豊前田之浦ニ
 碇泊ス萩藩誤テ外國船トナシ炮撃シテ之ヲ沈ム
 薩人死スルモノ三十餘人鹿兒島藩大ニ之ヲ啣ム
 ○二十七日大將軍江戸ヲ發シ海路ヨリ入朝○元

薩長藩
沈ム

元治元年

鳥取侯 世宗

治元年正月十日鳥取侯朝廷ニ建論シテ曰曩一朝
 議專ラ攘夷ヲ主張シ既ニ五月十日ヲ以テ其期ト
 ナシ或ハ將ニ大和ニ行幸シテ親征ノ首途ヲサ
 ントスルニ至レルガ臣竊ニ廷議ノ變スルト聞キ
 大ニ望ヲ失ヘリ夫レ堂々ナル朝廷ニシテ斯ク且
 タニ變動セバ天下ノ士民何クニ向ンヤ且三條家
 以下七卿及ヒ毛利家ノ京師ヲ脱スル其罪征サハ
 ルベカラザレドモ彼等ハ皆國家ノ為ニ士氣ヲ鼓
 舞シ攘夷ノ先鋒ヲラント欲スル誠忠ノモノナレ
 バ寛大ノ恩典ヲ以テ其入京ヲ許シ衆情ヲシテ一

將軍入京

島津三郎時義
ノ列タリ

相模ノ騎

致セシノハ縱ニ武備未ダ整ハズトモ神州舉テ焦土
トナルマデ弟賊ヲ掃攘セシム必セリ急ニ之ヲ明
断セヨ○十五日大將軍京師ニ至リ二條城ニ歸ス
尋テ越前中將モ入京ス○二十日大將軍右大臣ニ
越前中將大藏大輔ニ任セラル此日島津三郎モ多
年勤勵ノ功ヲ以テ從四位ニ叙シ少將兼大隅守ニ
任セラル初三郎ハ島津家ノ支族ナルガ是ニ至テ
諸族ノ列タリ○二十一日將軍一橋中納言會津中
將以下四十八族ヲ從ヘテ參朝ス朝紳モ皆列坐ス
是ニ於テ尹ノ官勅旨ヲ宣テ曰方今内紀綱廢弛シ

無謀ノ安

外醜夷強梁不實ニ國家危急ノ秋ナレバ人才ヲ擧
テ舊政ヲ修メガルベカラズ會津中將越前中將島
津少將土佐侍從等ハ頗ル忠實純厚ニシテ國家ノ
樞機ヲ任スルニ足ル汝等能ク之ヲ謀リ方今ノ衰
運ヲ挽回セヨ然レモ無謀ノ攘夷ハ却テ禍ヲ招ク
異ニ長門宰相等野客匹夫ノ説ヲ信シ宇内ノ形勢
ヲ察セズ暴發輕舉漫ニ攘夷ノ令ヲ布キ以テ夷舶
砲擊シ或ハ幕使ヲ暗殺シ加之實美等ヲ本國ニ誘
引ス此ノ如キ狂暴ノ輩必ズ罰セザルベカラズ然
レ是レ皆朕不徳ノ致ス所ナレバ汝等一同力ヲ協

北前船積

長洲奏

テ朕ヲ輔翼セヨ時ニ之ヲ翻覆ノ綸旨ト云々
○二月朔日萩侯訴テ曰臣曩ニ新聞紙ヲ閱
ルニ當春ニ至リ醜夷等軍艦ヲ率テ臣領内長門
國赤馬關ニ來襲セントアレバ故藩昧死以テ之ニ
抗セント已ニ砲臺ヲ衛レリ故ニ今ヨリ洋船模造
ノ我商船ヲリトセ其際ヲ往來セバ必ズ戍兵ニ報
告セシメント朝廷允サズシテ曰縱ニ夷船タリ
トモ妄ニ砲撃スルコ勿レ○六日三條家等其臣丹
羽豊前守ヲ上京セシメ建白シテ曰曩ニ鎖港ノ應
接中ナレバ暴發輕舉スルコ勿レト天下ニ今スレ

接漢ヲ拒
朝旨

三條公ノ建論

會津侯五万石
ヲ加増ス

氏今ニ至マデ未ダ其實効ヲ奏セザルガ近頃大樹
公再々上洛シ列藩モ亦輦下ニ會スレバ速ニ其期
ヲ決スルコ此好機會ニアラズシテ何時ニ於テヤ
シ而シテ若シ此機ヲ失ハバ遂ニ夷賊ノ術中ニ陷
ラシコ臣等ガ國家ノ為ニ深ク憂ル所ナリ請フ之
ヲ勇決セヨ○十日幕府會津中將ノ職務ニ勤勵ス
ルヲ賞シ俸祿五萬石ヲ加増ス此日山陵奉行戸田
大和守モ亦其精勤ヲ以テ御刀ヲ賜ハル○十一日
朝廷紀伊中將會津中將等數名ニ命シテ萩侯父子
ノ罪ヲ征サシム○十四日大將軍參朝シ曩ノ勅旨

三十八

284663

將軍勅旨ニ答

ニ答テ曰臣家茂不肖ニシテ去春上洛シ攘夷ノ勅命ヲ奉スレドモ未ダ其功ヲ奏スル能ハザレバ今般再命ニ依テ上洛スル必ス逆鱗ニ觸レテ嚴譴ヲ蒙ルベキニ却テ意外ノ震賞ヲ賜ハリ海岳ノ鴻恩何ヲ以テ答スベケンヤ自今舊弊ヲ除キ武備ヲ嚴ニシ無謀ノ攘夷ナスベカラザルノ勅意ヲ遵奉シ速ニ必勝ノ良策ヲ謀ラン○十五日鹿見島侯使者ヲ長州ニ遣シテ去年商船ヲ砲撃セシ事ヲ責メントス幕府之ヲ諭シテ後命ヲ俟タシム○十七日會津中將陸軍總裁職ヲ任セラル越前中將守獲職ト

陸軍總裁職トス

將軍勅旨ニ答

將軍勅旨ニ答

陸軍總裁職

ナル是ヨリ先ニ朝廷政務多端ナレバトテ島津三郎ヲ左近衛少將ニ任シ朝政ニ與ラシム時ニ三郎其藩士ニ諭シテ曰天下近來開港ノ說稍行レテ鎖港ノ論大ニ衰ヘタルモ畢竟朝議幕論ノ變動ヨリ致ス所ナレドモ朝命ヲ奉シテ弗賊ヲ討センヲ我等ノ素志ナレバ決テ之ヲ變スル勿レ○十八日幕府安積五郎渋谷伊豫作岡見富二郎等十九人ヲ刑ニ處ス五條ノ乱ヲ起セバナリ是日島津少將幕府ニ建議シテ曰攘夷ノ策略ハ横海ノ要港ヲ衛ルニ若カザルニ彼所ニ於テ未ダ砲臺ヲ築カズ陣營ヲ

島津三郎論旨

五條實味

島津三郎論旨

將軍勅旨ニ答

二十九

將軍勅旨ニ答

置カバ實ト無人ノ地モ同ジケレバ何ヲ以テ禁闕
 ヲ保護シ京畿ヲ警衛センヤ勿論無謀ノ攘夷ハ敢
 テ望ハ所ニアラザレドモ大樹公モ上洛シ後既ニ
 三十日間ヲ経タルニ何ゾ荏苒ト手ヲ束テ之カ備
 ヲナサバルベケンヤ○二十三日越前侯世子幕府
 ニ建議シテ萩侯父子ヲ寬典ニ處セント請フ此時
 萩侯モ屢上書シテ其罪ヲ謝シ且攘夷ノ期ヲ決セ
 ント請フ○二十五日一橋中納言朝廷ニ萩侯家臣
 ヲ輩載ニ召ストモ心ヲ留ルニ足ラザル旨ヲ建言
 ス是ヨリ先ニ朝廷萩侯父子ヲ責メント其重臣ヲ

長井精一山本
 誠一郎

大阪マデ上ラシメケレバナリ○二十六日長洲人
 長井精一山本誠一郎浪華ニテ自裁ス初薩州ノ巨
 商大谷仲之進外國ト貿易セント浪華ニ来リ多ク
 綿絲茶ノ類ヲ買ヒ船ヲ取浦ニ艤シ長寄ニ赴カン
 長洲別府浦ニ泊ス長洲ノ吏之ヲ糾訊シ遂ニ其
 首ヲ斬ル長井山本共ニ私ニ仲之進ノ首ヲ石灰ニ
 ニ藏シ大阪ニ来リ東本願寺門前ニ集シ二人其傍
 ニ自裁ス之ヲ以テ時人外國人ヲ忌ム最モ甚シキ
 モノヲ稱スルニ此二名ヲ以ス○三月朔日勅シテ
 元治ト改元ス○六日朝廷會津中將ヲ從三位ニ叙

元治ト改元ス○六日朝廷會津中將ヲ從三位ニ叙

會津族大隈

江戶大ニ其ス

諸藩兵大隈

藤田小四郎等
共ヲ案ク

シ參議ニ任ス中將之ヲ辞シ其祖正元ニ從三位ヲ
 追贈セシメテ請フ○十日江戸大ニ燒亡シ十四日
 曉ニ至テ漸ク鎮火ス○十五日脇阪淡路守建論シ
 テ速ニ夷賊征討ノ期ヲ決セシメテ幕府ニ請フ特
 ニ岡山侯モ亦急ニ諸港ヲ鎖シ列藩ヲシテ各自國
 ニ就キ兵備ヲナサシメ又萩侯父子ヲ寬典ニ處シ
 テ天下ノ物論ヲ鎮定セント建議ス○二十六日朝
 廷一橋中納言ノ後見職ヲ罷メ禁裡守衛及ヒ拱海
 防禦ノ總督ヲ命ス此月水戸藩藤田小四郎田丸稻
 之石衛門田中源藏等同志數十人ト源烈公ノ遺志

藤田小四郎

ヲ繼キ夷賊ヲ征討セント其本主ヲ奉シ兵ノ野州
 守都宮ヨリ大平山ノ間ニ起シ攘夷ノ軍須ト稱シ
 市民ニ逼テ金ヲ出サシム市民其督責ニ堪ヘズシ
 テ變ヲ訴フ幕府乃チ近傍ノ諸藩ニ命シ其黨ヲ追
 討ヒシメケルガ迭ニ勝敗アリ此時小四郎衆中ニ
 アリ尤少年ナレドモ其義勇ニ至テハ衆ニ抽ンズ
 蓋シ其父東湖ノ薰陶スル所ナラン初天保年間ニ
 水戸前中納言藤田東湖戸田忠敬等ヲ拔擢シ大ニ
 藩政ヲ改革セシガ國老結城寅次之ヲ悦ヒズシテ
 東湖等ノ新進事ヲ執ルヲ忌ミ大ニ其改革ヲ拒ム

レハ中納言乃ナ寅次ヲ疎斥ス是ニ於テ寅次密カ
 ニ藩内武備ヲ修ムル等ノ事ヲ以テ幕府ニ告ク時
 ニ中納言東湖等ト發佛ノ議ヲ起セバ僧徒等モ亦
 甚ク之ヲ怨ミ結城ノ黨ト共ニ中納言異志ヲ懷ク
 ト流言ス幕府モ其為ス所皆人ノ異表ニ出ヅルヲ
 忌ミ遂ニ中納言及ビ東湖等ヲ幽ス而シテ寅次再
 ト國政ニ與ルヲ得タレバ是ヨリ結城藤田ト黨
 派ヲ分チ藤田派ヲ正義黨ト云ヒ結城派ヲ奸黨ト
 云フ後外夷ノ事起ルニ及ンテ中納言幕政ニ預レ
 バ則チ寅次ヲ罰シ東湖ヲ擧ク爾來正好ノ兩黨互

正義黨奸黨

大角氏藏版

會津藩守備
 二再任シラル
 大橋委任ノ初

ニ相聞キ殆ト寧日ナシ幾何モナクシテ東湖黃泉
 ノ客トナリ中納言モ亦尋ヒテ卒スレバ結城ノ黨
 市川三左衛門朝比奈弥太郎等大ニ威勢ヲ振フ是
 ニ於テ小四郎等攘夷ノ兵ヲ擧テ之ヲ壓セントス
 ○四月八日朝廷越前中將ノ守護職ヲ罷メ正四位
 宰相ニ叙任シ再ヒ會津侯ヲ之ニ代ラシム○二十
 九日大將軍一橋中納言等ヲ從ヘテ參朝ス朝廷之
 ニ勅シテ曰皇國ヲ治安セシメ外夷ヲ征伏セシム
 ルハ幕府ノ職掌ニシテ今般將軍上洛シ列藩ノ建
 議ニ一決セバ是ヨリ政令一二幕府ニ委任セシム

大角氏藏版

新法六條

將軍東歸
津家歸

急ニ横濱鎖港ノ成功ヲ遂ケヨ且脱京ノ七卿及
 長州ノ暴臣ノ事モ亦速ニ處置セヨ是ニ於テ將
 軍乃チ新法六條ヲ献シテ曰今ヨリ毎年米二千俵
 ヲ神宮ノ供料ニ献納セン曰將軍ノ禪代諸侯ノ家
 ヲ嗣クヤ必ス入朝恩ヲ謝セシメン曰西國諸侯ノ
 關東ニ至ル先ツ京師ニ朝シ天機ヲ伺ハシメン曰
 九門ノ警衛萬石以上ノ諸侯ニ命セン曰諸國ノ土
 產ヲ献貢セシメン曰親王ノ薨スル歳内ノ音曲ヲ
 停止セン○五月五日大將軍東歸ヲ許サレテ京師
 ヲ發シ大阪ニ至ル○二十日大將軍江戸ニ歸ル是

池田屋樓上

ヨリ先ニ嶋津少將大隅守モ亦本國ニ歸ル而シテ
 一稿中納言越前宰相等猶京師ニ逗ル時ニ諸藩士
 及ヒ浪士等朝廷ノ政令ヲ幕府ニ任スルヲ以テ皇
 家ノ衰頹ヲ招クトナシ朝紳ヲ誹謗スルモノ道路
 ニ滿ツ○六月五日幕吏京師ニテ萩藩及ヒ浪士等
 數人ヲ捕フ初浪士等三條橋西ノ池田屋總兵衛ノ
 樓上ニ寓シ蜜カニ謀ル所ヲラントス守護職會津
 中將之ヲ捕ヘシハ捕卒ノ池田屋ニ入ルヤ浪士等
 傲然酒宴ヲ樓上ニ設テ杯盤狼藉タレバ捕卒其虚
 ニ來シ直チニ白刃ヲ抜キ之ニ逼リ遂ニ其魁首宮

平岡田二氏
斬

部鼎藏ヲ斬ル是ニ於テ殘黨或ハ逃走シ或ハ聞ヒ
死スルモノ十餘人○十六日夜水藩林忠次郎江幡
貞七郎等平岡團四郎岡田新太郎ガ奸曲ヲ逞クセ
シヲ惡シ其一稿中納言ノ旅館ヨリ退出途中ヲ
要殺シテ忠次郎二人モ其側ニ屠腹セリ尔来士氣
振興シ街上人ヲ殺スモ甚タ多シ○十九日萩藩
濱忠太郎久坂義助来島又兵衛寺島忠三郎等數十
人國老福原越後ヲ推シテ兵四百ヲ率ヒ上京シテ
請フ所アラント防州三田尻ヲ發艦シ二十一日大
阪ニ至リ漸ク進ンテ伏見ニ來ル是ヨリ先ニ萩藩

福原越後

天王山

朝神奈津

及ヒ諸國ノ脱士等七卿ノ復任宰相父子ノ冤ヲ解
キ其報國赤心ヲ貫徹ヒシト去年八月變動以
来ノ顛末ヲ陳マテ屢書ヲ朝廷ニ上レドモ朝廷毫
モ之ヲ聽サレバ浪士等憤懣措カズシテ曰我等
京師ニ上リ兵威ヲ以テ君側ノ大臣ヲ掃フニ若カ
ズト遂ニ此舉ニ及ブ○二十三日長軍山崎ニ至テ
天王山ニ陣シ書ヲ朝廷ニ出シテ七卿ヲ復任シ宰
相父子ノ冤罪ヲ赦シ速ニ攘夷ノ舉ヲランテヲ歎
奏スル再三時ニ在京ノ幕吏等此報ヲ獲テ且駭キ
且怖レテ為ス所ヲ知ラズ朝紳モ大ニ之ヲ懼レ奏

予ノ官一橋公
等ノ勇斷

議シテ曰長藩虎狼ノ勢ヲ以テ上京セシニ今之ニ
抗シテ兵端ヲ啟カハ天下忽チ土崩ニ至リ禁闕モ
亦危カラシ故ニ請フ長人ノ願ヲ宥メ万全ノ策ヲ
謀ラシトテ是ニ於テ尹ノ官及ヒ一橋中納言會津
中將等奮然議ヲ決シテ曰長人等諸國ノ浪士ヲ煽
動シ兵威ヲ以テ朝廷ニ強請セシト欲ス而シテ今之
ヲ許サバ彼益猖獗シテ京師ヲ輕侮セシト必セリ
急ニ之ヲ討タシニ若カズト在京ノ諸藩ニ命シテ
九門ノ警衛洛中ノ守護ヲ嚴ニセシム市民之ヲ見
テ負擔先ヲ争フテ郊外ニ避ケ府下頗ル騷然タレ

長藩又兵

京師ノ警衛

凝花洞

バ長藩ノ京師ニアルモノ其輦下ヲ騷擾セシヲ懼
レ退テ嵯峨天龍寺ニ陣ス○二十七日山崎ノ長兵
游撃隊ノ總督來島又兵衛伏見ニ至テ福原越後ニ
謀リ嵯峨ノ兵疎暴ノ舉アラバ之ヲ鎮静セシト兵
士三百餘ヲ引平シ旌旗ヲ靡カシ隊伍ヲ整ヘテ伏
見ヲ發シ嵯峨ニ赴ク京師之ヲ誤リ聞テ九門ヲ鎖
サシ終夜篝火ヲ官中ニ焚キ以テ變ニ備フ是時ヨ
リ會津中將等凝花洞ノ陣營トナシ官中ヲ去ラズ
世ニ花島ト稱スルハ即チ凝花洞ナリ○七月二日
朝廷一橋中納言ニ精勵嚴ニ輦下ヲ守衛スニキ旨

朝使、詰問

ラ命シ大監察永井主水正戸川鉾三郎ノ伏見ニ遣
 リ福原越後ヲ詰ラシメテ曰繼ヒ奏請スル所アラ
 ントスルモ兵器ヲ携ヘ来ル畢竟京師ヲ要スルニ
 以タレバ從來勤王ノ赤心ト大ニ齟齬セリ故ニ嵯
 峨ノ兵士ヲ國ニ返ヘシ越後單身ニテ其請ヲ所ヲ
 奏セヨ○三日福原越後永井戸川等ノ言ヲ以テ兩
 所兵ヲ諭ヒドモ敢テ聽カザレバ越後乃チ兩使ニ
 答テ曰曩ニ来嶋又兵衛ナルモノ嵯峨ノ兵ヲ鎮靜
 セント既ニ彼所ニ至レリ而シテ又兵衛ノ伏見ヲ
 發スルヤ京師誤傳シテ大ニ騷擾シ堅ク禁闕ヲ護

福原式守能

佐久間象山談
ナル

衛セシ等臣輩ノ罪逃ルベカラズ戦具ヲ用ユルニ
 至テハ去夏攘夷ノ令出テシヨリ上下一統戰鬪ノ
 志ヲ決シ甲冑劍戟一日モ身ヲ離サズ以テ戰期ヲ
 俟ツ而シテ今般ノ奏請スル所モ亦其事ナラバ兵
 具ノ備ヘザルヲ得ク故ニ京師夫レ之ニ意ヲ留ル
 勿レ時ニ長州ノ國老國司信濃等曾根竹兵衛内藤
 清兵衛以下二百餘人ヲ卒ヒテ嵯峨ニ来リ天龍寺
 ニ陣ス蓋シ福原越後等ノ暴動ヲ怖レテ之ヲ鎮定
 セント欲スルナリ○十一日夜京師ニテ浪士等松代
 藩佐久間修理ヲ要殺シ三條橋ニ掲書ス其略ニ曰

修理ハ元來西洋學ヲ好ミ交易開港ノ説ヲ主張シ
 中川官及ヒ會津中將等ニ謀リ都ヲ江戸ニ遷サントス
 ル國賊ナレバ之ヲ誅戮セリ修理號シテ象山ト云
 フ人トナリ豪邁倜儻文學核博ニシテ傍ラ洋書ヲ
 讀ミ頗ル海外ノ形勢ヲ審ニレ大ニ為ス所アラシ
 トス甲寅ノ歲吉田寅次郎ノ事ニ坐シ本國ニ幽セ
 ラレシガ後赦サレテ京師ニ上リ專ラ開國論ヲ唱
 ハ朝廷幕府ノ間ニ往來シテ大ニ周旋スル所アラ
 シトス其馬ニ騎ル常ニ洋製ノ馬具ヲ用ユレバ機
 車ヲ主トスルモノ之ヲ惡ミ事ニ及フナラン道路

之ヲ肥後人ノ所為トナス

野史氏曰西國英雄ハ智勇學識兼備セザルモノ
 ナシ故ニ能ク創業守成ノ大功ヲナスルニナラ
 バ國政ヲ改正シ物理ヲ發明シ遂ニ文明開化ノ
 域ニ進マシム我邦ニ至テハ然ラス智勇アル學
 識ナシ學識アル智勇ナシ近古未ダ能ク之ヲ兼
 ルモノヲ見ヌ獨リ佐久間象山ナルモノアリ今
 ヲ距ルニト餘年既ニ洋書ヲ讀テ各國ノ形勢ヲ
 審シ遷都開國等ノ論ヲ主トス其學識真ニ駭ク
 シシ而シテ國家ノ為メ大ニ周旋スル所アラシ

トセシガ事ニ及ハズシテ此禍ニ罹レバ未ダ全ク其智勇ヲ試ル能ハザレドモ之レ亦其學識ニ稱フニシ嗚呼近世ノ人傑誰レカ能ク之ト伯仲セシヤ

十四日長州ノ國老益田右衛門介亦鎮撫トシテ兵數百ヲ卒ヒ山崎ニ至リテ天王山ニ陣ス宰相父子ノ深ク暴動アルヲ憂フレハナリ是ニ於テ尹ノ宮會津中將等益憤怒シテ曰此時ニ當リ長人ヲ征セザレバ朝權地ニ墜テ後日何ヲ以テカ皇威ヲ振興セシヤ○十八日朝議征討ニ決シ檄ヲ諸侯ニ飛バ

益田門出等

子ノ宮ノ奮發

征討ノ檄文

ス其略ニ曰頃者萩藩福原越後等去年八月十八日ノ處置ヲ君側ノ姦臣ヨリ出ルトナシ兵威ヲ以テ朝廷ニ要請セントセシガ國司益田等モ名ヲ鎮定ニ託シ兵士ヲ擁シテ陸續上京ス其罪討セザルベカラズ列藩夫レ朝意ヲ體シ速ニ追討シ兵ヲ部署セヨ此時長兵又ヲ聞テ事ノ已ニ通ルヲ以テ乃チ議シテ曰ク空手ニシテ追討ノ兵ヲ受ルヨリ寧ろ先登シテ君側ノ姦佞會津侯等ヲ除カント士氣大ニ振ヘバ福原國司等モ強テ之ヲ拒ム能ハズ遂ニ侵襲ノ議ヲナス○十九日昧爽國司信濃崩黃威ノ

長軍大ニ振テ

蛤門變

曹ヲ載キ大和綿ノ直垂ヲ著シ金絲ノ履ヲ乘リ馬
 上ニ跨リ士卒三百餘ヲ卒ニ中立門ニ向テ途ニシ
 テ一橋家ノ兵カ中立門ニ馳セ至ラントスルニ遇
 フ國司ノ先鋒忽チ砲撃シテ之ヲ走ラセ追テ蛤
 門ニ至レバ長兵ノ隊長来島又兵衛既ニ此門ヲ破
 リ築地ニハル是ニ於テ兩軍力ヲ戮ヒ大ニ會津ノ
 兵ト戦ヒ殆ト之ヲ破ラントス此時ニ當リ薩州ノ
 隊長仁禮源之丞松形清左衛門等兵二百ヲ以テ馳
 セ来リ長兵ノ後ヲ襲ヒケレバ一橋會津ノ兵復テ勢
 ヲ得テ倏チ兵ヲ還ヘシ長兵ヲ夾ミ撃ツ来島等乃

勇士内田弥三郎

来島元五守

千軍ヲ敵シ敢死奮戦敢テ沮靡セズ時ニ肥後ノ脱
 七内田弥三郎モ長軍ノ中ニ編入セルガ千鈞ノ鐵
 槌ヲ揮リ廻ハシ敵兵ヲ毆殺スルモノ數十人兩軍
 掌ヲ拍ツテ其驍勇ヲ嘆賞シ暮ヲ移ステ數尺三藩
 ノ兵齊ク砲ヲ放チ飛丸雨ノ如クナレバ衆寡敵ス
 ル能ハズシテ長兵遂ニ潰乱シ信濃等嶮岨ニ退ク
 斯クテ来島又兵衛兜玉小民部等ト殘兵四百餘ヲ
 卒ニ復テ蛤門中立ノ兩門ニ向テ直チニ蛤門ヲ破リ
 勝ニ乘シ懸崖テ進ミ多年ノ宿志ヲ遂ケント金鼓
 ノ鳴ラシ凝花洞ニ入り又唐門ニ入ラントス適薩

三十七卷 卷之四 大角八藏

州ノ隊長吉利郡吉新寺ノ強兵三百餘人ヲ擁シ来
リ横ニ長兵ヲ撃チケレバ来島等軍中ニ令シテ曰
繼ヒ百騎ガ一騎ニナルトモ會津侯ノ首級ヲ獲ル
ニアラザレハ退クミカラズト格闘數合互ニ勝敗
アリケルガ驍將來島不幸ニシテ銃丸ニ中リ馬ヨ
リ落チ即チ賜言シテ曰急ニ我首ヲ刎テ本國ニ歸
レヨ時ニ衆敢テ近ヅクモノナケレバ怯夫我カ用
ヲナスニ足ラズト自刃シテ死ス是ニ於テ長兵復
タ大ニ敗レ戦死スルモノ三百餘人而シテ山等ニ
陣セル長兵ノ總督益田石衛門介完戸石馬介等ト

驍將來島氏銃
丸ニ中ル

山等ノ兵

手兵百人ヲ率ヒ天王山ニ陣シ隊長久坂義助入江
九一寺嶋忠三郎真木和泉等兵五百ヲ以テ高良大
明神香取大明神ト大書シタル白旗ヲ建テ嗟嘆ノ
兵士ニ後レテ来ル此時蛤門ノ戦セ既ニ終リテ丸
門堅ク閉ヂケレハ竟ニ鷹司邸ニ詣リ前關白輔烈
ニ謁シテ曰臣等會津侯ノ如キ君側ノ姦臣ヲ除カ
ント上京セシガ却テ追討ノ兵ヲ受ルニ至レバ一
同憤激シテ寧口屍ヲ官中ニ曝ストモ賊魁ノ首ヲ
獲ント決心セリ請フ貴邸ニ據ルヲ許セヨ既ニ
シテ越前彦根系名等ノ兵鷹司邸ヲ圍ハテ三匝時

鷹司邸ノ變

近世事情二編 卷之四 四下 大角八藏

西郷政之

中村氏勇武
絶倫

ニ彦根藩西郷政之介傲然長槍ヲ執リ自ラ呼ニテ
曰我ハ所謂一番槍ナリ来リ敵スルモノハ誰ガヤ
ト跳テ長軍ニ入ル長軍ニ筑前ノ脱士中村恆次郎
ナルモノアリ奮然政之介ニ敵セント短槍ヲ挈ケ
来リ相闘フヲ須臾恆次郎竟ニ政之介ノ胸膈ヲ突
キ之ヲ一撃ノ下ニ斃ス而シテ兩軍ノ雌雄未ダ決
セザルガ一橋中納言馬上ニ跨リ自ラ兵士五百ヲ
卒ニ来リテ越前等ノ兵ヲ援フ薩州會津ノ兵モ亦
馳セ至リ六藩ノ兵殆ト三千餘人ニ及ブ然レ長
兵曾テ之ヲ意トセズ炮戰戟闘以テ之ヲ防ク此時

近世事情編 卷之四

大角次藏版

朝紳性懦

一橋公激論

朝廷急ニ一橋中納言ヲ召ス中納言乃チ兩三騎ヲ
從ヘテ參朝ス朝紳之ヲ目迎シテ今日ノ勝敗如何
ト問且曰敗レテ和スルハ恥辱ナレドモ勝テ和ス
ルハ寛大ノ所置ナリ故ニ今萩侯父子ノ罪ヲ赦シ
入京アラシメヨ然ラバ誰カ能ク此雷洩電撃ノ變
ヲ起シテ銃丸ノ御座ヲ犯スヲナサシヤ中納言
怫然色ヲ起シテ曰諸君何ゾ一炮聲ヲ聞テ此ノ如
ク懼ルヤ夫レ長藩ハ禁闕ニ侵入ヒシ朝敵ナレ
バ共ニ天ヲ戴クベカラザルノ國賊ナルニ何ゾ和
睦ヲ以テセンヤ急ニ擊テ之ヲ鏖ニセント遂ニ火

近世事情編

卷之四

四十一

大角次藏版

入江九一寺
香登

久坂寺ノ明

ノ鷹司邸ニ縱火シ偶北風烈シケレバ黒烟地ニ
卷キ咫尺辨ゼス是ニ於テ入江九市半田紋吉川島
武二郎等はレ一世ノ曠軍ナリ豈ニ汚名ヲ千歳
遺スベケンヤト乃チ門ヲ啓キ吶喊圍ヲ衝テ縱横
交撃シテ劍光火ヲ散ズ時ニ兩軍ノ殺傷無算伏屍
道路ヲ蔽フ總督久坂義助寺島忠三郎等モ重傷ヲ被
リ暫時休息セント兵ヲ引テ門扉ヲ閉ガヌ六藩ノ
兵即チ門ニ傳テ攻撃甚ダ急ナレバ門扉將ニ破レ
ントス是ニ於テ長兵其支フマカラザルヲ知り自
ラ死ヲ決シ議シテ曰創ヲ痛ンデ薄上ニ斃ルヨ

近世書青二編

卷之四

リ今ニ及ンテ快戦シ骨ノ原野ニ曝スニ若カズ久
坂寺島等怒チ創ヲ哀テ起チ盛氣聲ヲ勵シテ曰不
可ナリ我等ハ身ニ重創ヲ負ヒ生還復再舉ヲ謀ル
ベカラザレバ敵ニ餒スルモ可ナリ公等ニ至テハ
今コハニ戦死ストモ何ノ功カ之レアラシ急ニ敵
兵ヲ衝キ山崎ニ走リ嵯峨伏見ノ兵トカラ合セテ
天王山ニ據リ再ヒ大舉ヲ籌リ會誓ノ辱ヲ雪カシ
モ晚シトセズ何ゾ無謀ノ死ヲナスベケンヤ公等
努力セヨト言畢ルヤ迺チ枕ヲ連子テ火中ニ伏ス
レバ真木和泉松山深藏品川彌九郎等久坂寺島兩

近世書青二編

卷之四

四十二

久坂寺島

氏ノ言ニ服シ急ニ隊伍ヲ整ヘ、圍ヲ潰シテ嵯峨ニ
至ラントス此時ニ當リ越前桑名彦根木俣土佐ノ
兵ハ表門一橋薩州會津ノ兵ハ北門彦根藩貫名筑
後新野左馬助等ハ裏門ヲ圍ミ各門ノ兵士雲ノ如
ク皆首ヲ引テ門ノ隙クヲ俟ツ而シテ裏門ノ兵其
俟ツ久キヲ以テ頗ル守衛ヲ惰ル真木和泉松山
深藏池尾茂四郎松田五六郎等之ヲ和リ俄ニ裏門
ヲ啓キ巨炮七門ヲ先鋒トナシ衆鼓譟シテ之ニ從
テ貫名新野等ノ兵大ニ狼狽擾乱シ復々止ムベカ
ラズ長兵機ニ乘シテ衝突シ直チニ嵯峨ニ赴ク此

長兵圍ヲ背

九角以藤原

福原氏伏見ヲ
發ス

小原氏ノ偽計

時鷹司邸ノ宮殿既ニ灰燼トナリ長軍モ敗走セバ
表門北門ノ兵凱歌ヲ揚テ退軍ス此役洛中大半兵
火ノ禍ニ罹リ公卿ノ第宅ハ勿論神社佛閣ニ至ル
マデ多ク一朝ノ烟トナル而シテ此日福原越後伏
見ノ兵五百餘ヲ卒ニ嵯峨山寄ノ兵ニ應ゼント夜
半伏見ヲ發スルヤ越後紺糸威ノ鎧ヲ穿テ程々緋
ノ軍袍ヲ着テ金革ノ烏帽子ヲ戴キ金甲馬ニ騎リ
白麾ヲ執リ威氣凜々ト旌旗ヲ靡カシ大ニ譟テ進
ミ既ニシテ深草宝塔寺前ニ至ル大垣ノ隊長小原
仁兵衛伴テ炬火ヲ山野ニ設ク數里照映煌々白日

新世書清編

卷之四

四三

大角氏藏版

大垣ノ伏兵後
一發ス

ノ如クニシテ此寺ヲ距ル一里餘而シテ其子小
原主計及ヒ高岡三郎兵衛等ニ命シ二百餘人ヲ二
隊ニナシ豫ノ道傍ニ伏セシメ自ラ亦兵士二百餘
人ヲ指揮シテ長兵ノ動止ヲ窺フ長兵之ヲ知ラズ
シテ大垣ノ兵尚遠シトナシ已ニ間違橋上ヲ過ル
ニ當リ伏兵齊ク發シ破聲雷ノ如ク彈丸雨ノ如ク
下ル越後乃チ伏兵アルヲ知レドモ之ニ抗セバ約
期ニ後レント急ニ令ヲ下シ海螺ヲ吹キ旗鼓ヲ進
メ直チニ馳テ此地ヲ過キントス大垣ノ兵乃チ籍
江ノ兵トカヲ合ヒテ拒戰甚タ力ニ是ニ於テ長兵

桂勝三郎等
勇所

寸歩モ動ク能ハバ士氣稍沮ハ時ニ此砲聲ヲ聞ク
ヤ桑名藩久徳久兵衛新徴組ノ魁首近藤伊佐美彦
根藩印其某等兵數百ヲ卒ヒ大垣ノ後援ヲナセバ長
兵益胆落チ神死シテ復タ戰志ナシ隊長桂勝三郎
三分徳三郎田中誠助等大ニ罵テ曰咄懦夫果シテ
事ヲナス能ハズト兩三騎ヲ従ヘ直チニ前ニテ敵
ヲ衝ク偶越後銃丸ニ中リ馬上ヨリ落チケレバ長
軍大ニ潰乱シ皆先ヲ争クテ遁ル越後等モ塵ニ身
ヲ脱シテ伏見ニ走ル大垣ノ兵乃チ追撃シ之ヲ殲
サント黒漆ニ至ル此時隊長中村九郎兵衛長軍ノ

平野次郎新

殿タリ忽ナ反顧シテ自ラ刀ヲ揮ヒ殊死防戦ス時
 ニ夜殆ト明ントスレバ大垣ノ兵乃チ軍ヲ引テ深
 草ニ歸ル是ニ於テ中村九郎兵衛等殘兵三百餘ヲ
 擁シテ丹波橋ニ至リ再ヒ京師ニ入ントス而シテ
 彦根大垣籍江ノ兵要路ニ梗塞スレバ路ヲ横大路
 村ニ取テ山崎ニ赴キ終ニ中立門ノ後ニ會スル
 ヲ得ズ此日洛中ノ燒亡スルヤ殆ト六角ノ獄舎ニ
 及バントスレバ長州ノ事ニ坐セシ三條家ノ臣丹
 羽出雲守筑前ノ脱士平野次郎及ヒ五條ノ殘黨銀
 山ノ浪士等數十人ヲ獄中ニ斬ル其連焼ニ乘ジテ

次郎が辞世ノ歌

逃レンテテ慮レバナリ次郎乃下ニ臨ンデ辞世ノ
 歌ヲ賦ス頗ル粗傲卒直ニシテ婉暢ノ風ニ及ケレ
 ドモ亦忠嘆義慨ノ志ヲ見ルニ是ル詞ニ曰ク、ギ
 ミニサ、グマツリシワガイノキイヤコノスツル
 トキハキニケレ○二十日幕府薩州ノ兵ニ命ジテ
 嵯峨ニ至リ長兵ノ餘黨ヲ討タシム是ヨリ先ニ國
 司信濃京師ノ師ニ利ヲ失ヒ僅ニ殘兵五十騎ヲ以
 テ天龍寺ニ投ズレドモ京軍ノ襲ヒ来ルヲ度リ既
 ニ山崎ニ走レバ薩兵ノ隊長吉田信太郎日向直助
 大ニ望ヲ失ヒ天龍寺ヲ燔テ去ル○二十一日會津

勝兵衛ヲ失フ

真木氏之諭

桑名ノ兵山崎ヲ攻ル初真木和泉以下五十餘人山崎天王山ニ来リ福原等ト再舉ヲ謀ラント欲セルガ伏見ノ兵モ既ニ潰ユレバ殘黨百餘人ヲ嘯集シテ之ニ據ル時ニ衆鬪志ナクレバ真木和泉之ヲ諭シテ曰此山ニ據テ兩三日ヲ支ヘナバ忽チ宰相父子ノ上京スルニ遇ハン然ラバ則一戰國賊ヲ誅スベシ公等情ル勿レ偶菽侯讚州多度津マデ来レルガ昨夏ノ仇ヲ報ントテ洋船長門ニ侵入スルヲ以テ直チニ西歸セシトノ報至レバ衆乃チ議シテ曰敗餘ノ再舉勝算アルベカラズ且本國ニ大事アル

長軍西歸ノ議

真木松山ノ勇決

之ヲ捨ルハ何ゾ勇士ノ本色ニアランヤ今急ニ本國ヘ下リ洋船ヲ攘フテ後再舉ヲ謀ル未ダ晚カラズト衆議一決マシカバ真木松山等曰公等ノ議論極メテ當レリ然レモ我輩ハ此軍ノ魁首トナハル卒ヲ敵舞シテ此大敗ヲ取ル何ノ面目アリテ君侯ニ謁センヤ故ニ公等努力カシ本國ニ歸リ再舉ヲ謀リテ我輩が千古ノ辱ヲ雪ケヨ言未ダ畢ラザルニ遠村巳ニ金鼓ノ聲アレバ是レ必ス追討ノ兵ナラントテ衆先ヲ争フテ山ヲ下リ西歸ス少馬アリテ會津藩神保田内藏助等果シテ千五百餘ノ兵士ヲ

會津ノ兵事大ニ歎カシム

卒ニ来ル新徴組之が先鋒トナリ彦根桑名ノ兵之
 が應援ヲナシ大ニ噪テ進ミ山上ノ寂寞タルヲ見
 テ皆曰咄我等始テ長人ノ怯ナルヲ知ル渠一敗
 既ニ死ヲ畏レテ本國ニ還ルヲラント徐々ニ山ヲ
 登リ漸ニシテ其中坂ニ至ルヤ真木松山等林間ヨ
 リ銃ヲ其先鋒ニ放テ銃丸雨ノ如クナレバ新徴組
 大ニ狼狽騷擾シテ山ヲ下ル長兵機ニ乘シ山上ヨ
 リ聲ヲ勵マシテ會賊俟テヨ俟テヨト叫ビケレバ
 會津ノ兵モ如何ナル謀略アラシヤト敢テ近ヅク
 モノナカリシガ真木松山以下十七人衆寡敵スベ

真木氏ノ歌

カラザルヲ知リ火ヲ山上ニ縱テ各火中ニ投死ス
 是ニ於テ會津ノ兵士等勇ヲ鼓シテ齊ク上ル至レ
 ハ則唯十餘人ノ亡骸灰燼ノ中ニ横タハルヲ見ル
 ノミコシテ大ニ其歎カレシヲ愧ツ此時真木和泉
 ガ亡骸ノ傍ニ辞世ノ歌アリ詞ニ「ヤマノミ子
 ノイワチコウジマシモワレトシツキノヤマトダ
 マシイ世人斯ル剛勇ノ男子モ亦心ヲ歌道ニ潜ム
 ルヲ以テ幽齋ノ風アリトナス是ヨリ先ニ幕府大
 坂城代松平伊豆守及々和歌山藩ニ命シテ京橋玉
 造ニ砲臺ヲ築カシメ之ヲ馬出ト唱ヘ巨炮數十門

ヲ置キ以テ不虞ニ備ヘ且高智津山高松島取岡山
等十餘藩ニ淀川邊ヲ警衛セシム此日山崎ノ敗兵
水陸ヨリ遁走シ大坂ニ出ントセルカ忽チ一船淀
川ヲ下リ春日部村ニ着岸スレバ高松藩如何ニテ
之ヲ捕ヘント和歌山侯ニ伺フ侯乃チ令ニテ曰砲
撃シテ之ヲ殲セヨ時ニ使番新見内膳侯ノ側ニア
リ奮然進シテ曰敗餘ノモノヲ捕ル何ゾ銃丸ヲ煩
スニ足ランヤ一喝之ヲ縛スベシ請フ我等ニ任セ
ヨト急ニ馳テ河岸ニ至リ白刃ヲ揮ヒ跳テ船中ニ
入レバ高松藩競テ之ニ繼ク船中ノ長兵大ニ駛ヒ

使番新見内膳
一武勇

北條瀨兵士

長州邸ノ儲米
ノ状

テ或ハ水中ニ投死シ或ハ割腹スルモノ二十二人
遂ニ一人モ逃ル能ハズ後幕府新見ガ單身直進ノ
最壯ヲ賞ス而シテ此餘長兵ノ處々ニ捕ハルモノ
其數ヲ知ラス○二十二日黎明大坂長州藏邸ノ留
守居北條瀨兵衛浪華ヲ發シテ本國ニ歸ル蓋シ幕
府長藩ノ禁闕ヲ擾乱セシ罪ヲ責メ北條氏ノシテ
大阪ヲ去ラシムルナリ○二十三日幕府大阪ノ防
火夫ニ命シテ長州ノ藏邸ヲ毀タシメ其儲米四千
八百七十石ヲ収メ以テ火災ニ罹リタル洛中ノ民
ニ賑貸ス○二十四日幕府外國奉行池田筑後守河

外國使節來後
守等計ニシテ

津攝津守河田相模守等ノ使命ヲ辱シムルヲ以テ或
ハ俸禄ヲ削リ或ハ禁錮セシメ更ニ合原猪三郎ニ
外國使節ヲ命ス去年筑後守等鎖港ノ幕命ヲ奉シ
各國ニ使シ先ツ佛蘭西ニ至テ之ヲ説ク佛人肯シ
ズ是ニ於テ筑後守等渠ノ文物典章煥然タルヲ
觀テ大ニ悟ル所アリ遂ニ他邦ニ行カズ是月ニ至
テ歸朝ニ事ノ説クメカラザルヲ陳ブレバナリ○
二十八日幕府大ニ諸藩ノ戦功ヲ賞シ朝廷ニ請フ
テ藩主ノ位階ヲ進メシム此日朝廷松平土佐守ヲ
少將ニ任ス其久ク京師ニ通リ精忠ヲ抽クズルヲ

高野庚少將ニ
任ス

長防ヲ追討ス
令下シ

朝鮮數名機疑
ナリ

巡船長州ヲ經

以テナリ○八月二日幕府長藩ノ輩下ヲ侵セシヲ
以テ朝廷ニ請ヒ毛利家一族ノ官將ヲ削リ遂ニ長
防追討ノ令ヲ諸藩ニ下シ紀伊中納言ヲ總督松平
越前守ヲ副將軍トナシ薩州以下二十餘藩ノ兵ヲ
分署シ將軍モ亦親ラ之ニ赴カント大ニ行軍ノ治
道ニ命シテ糧饌ヲ備ヘシム此日朝廷十九日ノ變
ヲ以テ鷹司前関白中山前中將有拙川宮正親町大
納言日野大納言橋本中納言石山少將等十數人ノ
參朝ヲ禁ス其與謀ヲランコトヲ疑ヘバナリ○五日
洋船十數艘長州赤馬関ニ来リ襲フ是ヨリ先ニ各

長軍和靖

國公使橫濱ニ會シ長州ニ事ヲラン、日ニ軍事ヲ
 議セルガ幕府長防追討、今ヲ下セバ之ニ先ツテ
 襲撃セント遠ニ軍艦十八艘ヲ以テ赤馬洲ノ襲
 長藩炮ヲ發シテ之ヲ防ク銃丸交飛ト炮煙海ヲ蔽
 フ斯クテ日巳ニ暮レバ兩軍兵ヲ引ク○六日洋船
 曉ニ乘シテ急ニ砲臺ヲ撃ツ、甚シ長藩伴リ走リ
 テ之ヲ避クレバ渠即チ上陸シ隊伍ヲ備ヘ砲撃シ
 テ進ミ陣營ヲ構キ直チニ角石山ニ據リ軍ス○七
 日長兵渠ト炮戰數合互ニ勝敗アリケルガ長藩、
 彈藥已ニ竭キケレバ其敵スベトラザルヲ度リ使

尾張大納言

長府侯、尾井
侯、三、書

ヲ馳セテ和睦ヲ請フ渠責ムルニ昨年ノ舉動ヲ以
 テス長藩乃チ朝令ヲ出シテ長藩ノ擅意ニアラザ
 ルヲ示セバ渠漸クニシテ之ヲ領シ後兵ヲ卒ヒテ
 横濱ニ來ル○八日幕府紀伊中納言、總督ヲ罷メ
 尾張大納言ヲシテ之ニ代ヲシム○十六日長州侯
 書ヲ龜井侯ニ與テ曰今般家臣亦師ニ上リ強請メ
 ル所アラントスレバ國老三名ヲ遣リ之ヲ鎮靜メ
 レメケルガ是レ亦却テ其首謀ヲナシ大ニ整頓ヲ
 發揚セバ臣父子ノ罪逃ルベカラズ然レモ勤王愛
 國ノ素志曾テ變セザレバ請フ腹臆ノク閑下ノ所

見テ怒諭シ且朝廷幕府へ謝罪ノ事周旋ヲラン
 此日武田伊賀守等那阿港ニ進ミ攻撃數合遂ニ
 坂テ之ニ據ル是ヨリ先ニ結城ノ黨市川三左衛門
 等幕府ノ兵ト日ニ藤田小四郎等ヲ築波山ニ攻ム
 藤田等勇ヲ鼓シテ防禦甚々カレドモ畢竟烏合
 ノ兵ナレバ既令一ナラズシテ屢軍機ヲ誤リ築波
 山殆ド保タザラントス是時ニ當リ市川等幕府ト
 議ヲ合セルヲ以テ益勢ヲ得レバ悉ク藩内ノ正黨
 ヲ除却セント成ハ之ヲ凶シ成ハ之ヲ疎存ス正黨
 大ニ之ヲ憤激シ江戸ニ至リ藩主ニ訴ント遂ニ三

築波山保タザラントス

松平大炊頭 武田新樂齋

百餘人國ヲ脱シテ下總小金井ニ至ル幕府豫メ之
 ヲ知り其徒ノ江戸ニ入ルヲ許サズシテ即チ鎮撫
 ヲ水戸侯ニ命ス時ニ武田伊賀守モ江戸ニアレバ
 自ラ其任ニ當ラント請フ幕府乃チ水戸ノ支藩松
 平大炊頭ニ武田ヲ属シテ之ヲ鎮メシム是ニ於テ
 大炊頭武田等小金井ノ徒ヲ率ヒ水戸ニ至リ將ニ
 城中ニ入ントス而シテ武田氏モ正義ノ黨ナルヲ
 以テ嘗テ中納言ニ渥遇ヒラレシモノナレバ市川
 等之ヲ憚ビズシテ豫メ兵ヲ各處ニ分チ其舉止ヲ
 俟ツ武田等之ヲ却ゲテ過ントス市川ノ兵乃チ銃

長州英領事
上書

ヲ其中隊一放テ飛丸兩注スレバ武田、兵大ニ乱
レ武田等因テ大炊頭ヲ奉シ磯ノ濱ニ走り既ニシ
テ軍議ヲテ急ニ磐船山ノ穴黨ヲ襲撃スレバ其
隊長川上某以下闕死スルモ、十人磐船山、兵大
ニ潰乱シテ那阿溪ニ退ク武田等追撃シテ遂ニ此
日ノ勝利ヲ得ルト云○十七日萩侯書ヲ朝廷ニ上
リ其罪ヲ謝シテ曰ク去月十九日ノ事臣恐懼戰慄
辞ノ以テ謝スベキナシ勿論福原益田國司、三名
ハ臣ガ鎮撫ノ命ニ背キ却テ之カ謀首トナル實ニ
天地ニ容レザル逆臣ナレバ今此三名ヲ臣ノ支族

各國公使贈金
ノ通シ

幕議紛々

毛利左京亮郎ニ幽シ以テ後命ヲ俟タシム伏テ請
フ嚴譴ヲ以テ之ヲ處分ヒンテ此項暴ニ長州ヲ
襲ヒシ各國公使等幕府ニ逼テ曰哉等長州ノ事ニ
依テ贖金三百万元ヲ得ント欲スレバ再々長州ニ
至リ自ラ之ヲ督責センカ將タ日本政府ニ於テ之
ヲ長州ヨリ取り以テ我等ニ與フルカ敢テ指揮ヲ
請フ時ニ幕議紛々或ハ曰征討ノ期モ近キニアレ
バ先ツ渠ヲシテ之ヲ長州ニ逼リ其藩勢ヲ抑壓セ
シメ然レ後渠トカヲ合セテ其罪ヲ討タシ或ハ曰
然ラズ其勢ヲ抑セント欲スルモ、ハ却テ渠ニ我

日本全州ノ國カヲ分割セシムルモノナレバ此策甚ク不可ナリト遂ニ衆議一決シ渠ニ答テ曰我政府ヨリ之ヲ長州ニ取り以テ各國ニ令與セン是ヨリ各國ノ贖金ヲ促ス一日ヨリ甚シナレバ幕府頗ル其所置ニ苦ム○九月二日幕府府下ノ防火夫ニ命シテ曰来ル七日長州郡ノ家什ヲ芝新錢座ノ調練場及ヒ深川越中島等ニ於テ燒キ捨ツベシ○七日筑波山ノ徒藤田等幕兵ノ為ニ破ラレ兵三百ヲ率ヒテ武田等ガ那阿濤ノ軍ニ投ス是ヨリ先ニ藤田等大ニ市川等ガ類ニ武田伊賀守等ノ罪ヲ

幕府長州郡ノ家什ヲ燒ク

筑波山兵潰ニ

浪士築波山ヲ逃ル

箕作福沢氏救ヲ推テラレ

嗚ラシ幕府ニ訴テ城中ニ居ル其徒ノ妻孥ヲ擄ヘ獄ニ下セシテ怒リ遂ニ武田ノ兵トカヲ戮ヒ奸黨ヲ撃タントス時ニ軍中ニアル浪士等相議シテ曰我等ノ素志ハ攘夷ノ義舉ヲ起サントスルニ何ガ兩黨ノ私闘ニ關カラシヤト相率ヒテ逃亡スレバ幕府ノ兵其機ニ乘シテ大ニ此利ヲ得ル○十三日幕府關八州ノ諸侯ニ令シテ曰頃日築波山ノ賊徒解散シ處々漂泊スレバ急ニ之ヲ捕縛セヨ此月諸侯及ヒ麾下ノ士競フテ將軍ノ長防親征ニ從ヒント請フ○十月六日幕府箕作貞一郎同秋坪福澤

江戸ノ戸數十
三万三千六百
二十一軒

諭吉ヲ拔擢シテ翻譯ノ事ニ從事セシム○十日鳥
井丹波守田沼玄蕃頭等市川朝比奈等ノ兵ト大ニ
武田等ヲ討ツ是ヨリ先ニ市川等温言ヲ以テ大炊
頭ヲ招キ至レバ則其賊兵ニ與スルヲ責メ台命ヲ
以テ之ニ自裁セシメ日ニ兵ヲ増シテ那阿添ヲ圍
ム居ルヲ數日武田等ノ兵糧糶殆ト竭キ其兵又内
應ヲナスモノアレバ益シ今日ノ舉モ其機ニ投ズ
ルヲラン○十六日幕府昨春將軍ノ上洛セシヲ祝
セントテ金六万三千圓ヲ府下ノ市民ニ賑フ時ニ
品川ヨリ吉原ニ至ルマデ府下ノ戸數十三万三千

殿屋平三郎死
ヲ賜ハル

武田等奉還
至ル

六百二十一軒ナレバ之ヲ平均シテ每軒錢三貫百
三十九ニ當ルト云○十八日幕府肥田濱五郎ガ蘭
國ニ使セシヲ以テ黄金若干時服二領ヲ賜フ○十
九日幕府脇屋卯三郎長藩遠藤太一郎ニ書ヲ贈リ
関東ノ事情ヲ通セシヲ責メ命シテ之ニ割腹セシ
ム此日遠藤太一郎奥平數馬モ死ヲ賜ハル○二十
日松平左京亮ノ兵小艇十二艘ニ乘リ那阿添ノ半
寫櫻ヲ襲ヒ大ニ武田等ノ兵ヲ走ラセ其兵器ヲ奪
フ○十一月十日幕府勝麟太郎ノ軍艦奉行ヲ罷ム
○十三日武田等兵八百餘ヲ卒ヒテ京師ニ至リ事

ヲ訴ント園ヲ衝キ上州ニ至リ此夜利根川ヲ渡リ
遂ニ美濃路ニ至リテ大田川ヲ渉リ加納驛ニ舍シ
一橋家が其主家ノ縁族ナルヲ以テ之ニ投シ哀訴
セントテ將ニ京師ニ入ントセシガ幕府沼道ノ諸
藩ニ令シ之ヲ討タシムレバ至ル所幕兵ノ梗塞セ
ザレナキヲ直チニ馳テ之ヲ過ギ屢ニ茲ニ達ス此
驛モ亦彦根大垣ノ兵屯集スレバ武田等乃テ路ヲ
轉シテ越前ニ赴ク○十二月十二日林伊太郎學問
所頭取ヲ罷メラル伊太郎號シテ鶴梁ト云フ江戸
ノ人ニシテ少時磊落不羈ナルガ年二十四ニ至リ

林鶴梁

三十七卷

大角氏藏版

節ヲ折リ書ヲ讀ミ長野豊山先生ニ事ヘ學業大ニ
進ミ後御筆筭同心ヨリ參速二州ノ代官トナル至
所皆政績アリ而シテ伊太郎劇職ニ居ルト雖嘗テ
筆硯ヲ廢セズ作ル所ノ文章積テ數冊トナル名ケ
テ鶴梁文抄ト云フ文勢快活潑々飛ント欲ス實ニ
關左文壇ノ淵藪ナリ○十九日幕府薩州會津彦根
寺數彦ニ名刀一口ヲ賜フテ禁闕防禦ノ戦功ヲ賞
ス○二十七日尾張大納言嚮ニ長州ニ脱走セシ三
條以下五卿ヲ薩州肥後等ニ預ケシ事ヲ幕府ニ報
ス蓋シ七卿ノ内一卿ハ黄泉ノ客トナリ一卿ハ佗

尾張大廣島
次々

三十七卷

大角氏藏版

五五

大角氏藏版

邦ニ寓スルヲ以テナリ是ヨリ先ニ尾張大納言長
 防追討ノ兵ヲ督シ藝州廣嶋ニ至リ吏ヲシテ毛利
 家ノ罪ヲ問ハシム時ニ萩侯父子專ラ恭順ヲ主
 シ自ラ寺院ニ屏居セシガ問罪ノ師至ルニ及ン
 益田國司福原主家ノ難ヲ解ント自ラ罪ヲ引テ自
 裁ス萩侯乃チ城中家毎ニ門戸ヲ閉サシメテ幕
 吏ヲ延キ其首級ヲ出シ以テ罪ヲ謝シケレバ是ニ
 至テ尾張總督五卿ノ處分ヲナス此時三國老各辭
 世ノ歌ヲ賦ス益田ノ歌ニ曰「イマサラエナニアヤ
 シマンソラセミノヨシモアシキトナノカワルヨ

益田國司福原
 三名辭世ノ歌

「國司ノ歌ニ曰「ヨシヤヨシヨヲサルトテモワガ
 コ、ロミクニノタメニナホツクサババ福原ハ歌
 ニ曰「クルシサハタヘルワガミノユウケアリソラ
 ニタツナハスタガテニスル是月武田等越前大野
 ノ近傍ニ至リ江州海津ヲ過ントス加州ノ兵肯ン
 ゼス而シテ一橋中納言モ其來リ投セントスルヲ
 聞キ以ニ先ツテ追討セント朝廷ニ請ヒ自ラ兵士
 ラ率ヒテ京師ヲ發シ海津ニ至リ遂ニ武田等ヲ其
 地方ノ各藩ニ幽セシメテ京師ニ還ル武田藤田等
 明年ノ春三月越前敦賀ニテ幕吏ノ為ニ欺斬セリ

耕雲齋詩

ル武田名ハ正生耕雲齋ト號シ又如雲ト號ス嘗テ
下喜多ノ崖山樓ニ題スル詩アリ以テ武田氏ノ一
世ヲトスルニ足ル詩ニ曰崖山妖血沈兼與禮樂衣
冠掃地空借問文章經術士年來畢竟讀何書

野史氏曰兵ヲ用ユルノ要ハ名義ヲ正スニアリ
名義苟モ正シカラザレバ兵卒ノ多寡ヲ問ハズ
土地ノ嶮難ニ拘ラズ侵蹇窮蹙遂ニ大敗ヲ取ル
豈ニ慎マザルベケンヤ武田藤田ニ氏ノ舉ハ名
ヲ攘夷ニ假レト雖稍私憤ノ情ヨリ出ルノ嫌疑
ナキ能ハザレバ其京師ニ入ントスル一槁家之

ヲ拒ム亦理アルニ似タリ而シテニ氏ノ兵元ヨリ
烏合嘯集ノ徒ナレバ一勝一敗能ク數月ヲ支ルモ
ノハ其將師タルモノ善ク兵ヲ用ユルマアラスマ
然ラバ則ニ氏モ亦豪傑ナル哉

近世事情卷四終



近世事情 全七册 改正日本年表 全二册

頭書 日本國盡 全五册 格賢小合嶽國史直譯 全二册

增評唐宋八大家文格讀本全五册 各國大盛龜鑑 全一折

作文必携 雜字新編 全一册 耶蘇教大意 全一册 初篇

山田氏文法書 全一册 西洋博說 全三册

頭書布告字解 開化消息往來全一册 清國容博物新編 二編全二册

支那 談判始末 全二册 日本盛衰記事全五册 初篇

十八史略字引 全一册 新四史字引 全一册

改正十八史略字引 全一册 右之外新刻物數版有之候間 最寄書林三御求可被下候也

山田俊藏 著
東京芝三田四國町一番地
大角豊次郎 同
日本橋樽正町六番地

明治八年十二月十五日版權免許

東京日本橋樽正町六番地

大角豊次郎



